川柳塔

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
昭和四十四年七月二十五日　印刷
昭和四十四年八月一日発行（毎月一日発行）
（第四十七号）

No. 47

八月号

あなたの胃にも!

三橋達也(東宝)

アペールは、胃をイキイキ動かし、胃を健康にする新しい胃腸薬です。もたれ・食欲不振・胸やけ…など、胃の不快症状を解消します。
ぜひ、あなたもお試しください。

胃炎・胃下垂に——

アペール®

(包装) 36錠 / 72錠

フジサワ薬品

フジサワ会のほどあもとめください

料理も電話も **551** ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広東料理・焼餃子

豚饅 蓬莱 焼売

大阪なんば

◆出張販売店◆

なんば高島屋／心斎橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
堂島地下センター・弁天阜頭支店／中之島サン・ストアー

電柱にせり合う広告藪医なり
せめて楽に死ねる薬をききたがり
冷蔵庫ビールも土曜日らしく冷え
足跡も残さぬ蚤にかまれたり
いつ死んでもいいとは老骸生意気な

中島生々庵

今月のことば

「行ってらっしゃい。気をつけてね」こうした挨拶はどこの家庭でも聞き馴れたことである。しかし昨今のように交通戦争時代には朝出かけて帰宅するまでの一瞬一瞬は蟻地獄の連続とさえ言える。石田国鉄前総裁は現職時代から今日でも毎朝事故災禍の起らぬ祈念を続けているそうだし、磯崎現総裁も就任後の事故頻発を天譴とし自らを厳しく律していると話している。鉄道運行等というものは科学の極致による計算に委ねられて、神仏の加護等は入り込む余地はないものと信じているのに、当面の責任者ともなればそうした心境も伺い知れるようだ。してみると「行ってらっしゃい。気をつけてね」は決して形式的な挨拶や世辞ではない事が判る。毎月の句会にいつも先登第一に出席する人が、たまに少し遅れでもするとなんぞあったのではと案ずる。私の知人に「閉会の辞」とあだ名される常習遅参者があるが、こうした人は途中事故等あっても連絡がひまどる恐れがあり心得べきものである。

川柳塔八月号

川柳塔八月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

今月のことばと句帖……中島生々庵…(1)

川柳塔…(同人作品)……中島生々庵選…(4)

既成観念の打破……若本多久志…(2)

川柳日記……麻生葭乃…(19)

川傍柳初篇研究…(七十四)……(20)
前田喜代人・岡崎重義・清博美・藤井和雄
川端柳風・故高須亜三味・丸十府・岡田甫

秀句鑑賞……清水白柳…(24)

原句をたしかめて……麻生葭乃…(19)

ある敗戦日記抄……東野大八…(22)

私論・柳論

既成観念の打破

昨年十二月号の本欄で、本田恵二朗氏が「二つの流れ」と題して新しい傾向の句と旧来の句に対して述べておられたので、私の考えも述べてみたいと思う。

おそらく、恵二朗氏の言われる「本格」というのは、某柳社の唱える本格川柳とは違うが所謂、旧来の本流とでもいう川柳の中にも激しい革新的な感覚を盛られた句は多く見られるし（路郎先生の句集、旅人などの中でも）又革新派といわれる句の中にも、チョン髷的な思想の窺える句もある。要するに我々日本人は悉くと言ってもよいくらい、自分の基準で、自分の経験で、自分の毎日おかれている場を判断の基準にしてものを考える癖が多い。従って既成観念というか、一つの固定した考えを打ち破ることの出来難い狭さの中に

趣味を越えている……森下冬青…(44)
雅号ぶっちやけばなし……阿万万的…(59)
山や海……高鷲亜鈍…(19)
近作柳樽……菊沢小松園選…(26)
初歩教室……本田恵二朗…(38)
大萬川柳「横顔」……清水白柳選…(40)
★柳界展望……(薫風)…(42)
★本社七月句会……(庸佑)…(57)
★各地柳壇……(文秋)…(61)
「転勤」……藤井春日選…(36)
一路集「野心」……松岡委滄浪選…(36)
「折り目」……上田翠光選…(37)
★編集後記……(一三夫)…(65)

生きていることに、先ず反省をしなければならないと思う。

最近、犬養道子さんから聞いた話だが、従妹さんのご主人がオーストラリア大使館へ転任が決まった時、夫人は先方の大使館に電話して、南に広い芝生の庭がある家をさがして貰い、いよいよその家に入ってみてハタと驚いた——太陽は家の北側に当たって廻っていたからであり、折角の芝生の庭も子供達のよき遊び場にはならなかったのであった。

々が小さい時から、常に太陽を廻っているものだと思い込んでいた、その既成観念が無惨にも打ち破られたのである。

学校で習った地理では、地球は丸いもので赤道はその真中を通っており、日本の位置は赤道の北にオーストラリアの位置は南にあるということもよく知っていた筈なのに、こうした結果を生んだものと言えよう。この話は、我々川柳作家にとっても、深く考えさせられることではなかろうか。

（若本多久志）

中島生々庵選

また起きてはると子供のよう寝かせ
カシミヤの毛布がある日重く臥し
悪友が一番しょんぼり日々見舞い
レントゲン俺の強気は写ってず
連休の子等にすまない病臥する

鳥取市　藤本礎山

小草植える水照り顔に縋つくる
真昼の蛙が静けさを呼びさます
わらび採りの人声うら山に吸いこまれ
山水せき止めてうぐいの群れる蔭つくる
心にふれる美しさを消すまいと眼をつむる

大阪市　正本水客

雨の色今日は何色梅雨ごもり

香川県　三井酔夢

惜しみなく与える愛の犬と住む
計算機ガチャガチャガチャとひからびる
花ばさみ毛虫を切った悔五月
可愛想かわいそう螢を放つ

藤井寺市　西いわを

顔洗う時に心も洗う朝
手も脚もツンと伸ばして蚊の飛翔
呼吸吸うて止めてよろしいレントゲン
縄飛びのリズムに合し蟬の啼く
試めされているとは知らずよくしゃべり

笠岡市　木山遠二

山ほどの調書で証拠不充分
市議或日君子のような口を利き

友人鮮秋より懇な歌信を受け句を以て返す

背負投を食い起上れないも齢
老ぼれのセンチにつける薬なし
有難し今日の歌信に夫婦泣く

広島県　高橋鬼焼

ぬかるみの土踏みしめる職があり
寝押しでもいいさ二〇才の恋つづく
ふりかえるゆとりもなくてペタル踏む
健康という財産へ初夏の風
いじらしい言葉になって酒をつけ

高槻市　傍島静馬

束の間の人生今日は飲んだろか
借金を返しに行って借りなおし
意地っ張りあくまでしんせい契うてます
蠅たたき持ったら蠅はもうおらず
のろまとも云えずしとやかなお嬢さん

兵庫県　遠山可住

議事堂を知らん運転手に出合い
ボロ買いの言うた家相がよう当り
娘用の石鹸使こて叱られる
手伝いに来たけど電気とガスばかり
乗り換えのないので行くと父の老い

倉敷市　本田恵二朗

ふるさとを自慢するほど老い給い
刃の方を握ってしもたような運
人間にねらわれてると知るや月
移植ごて持てば故郷の丘浮ぶ
物量に負けたと知った自己嫌悪

豊中市　戸田古方

こんなもんかでもない性の本
緑の風今日も照りそう背広きる
差向いに坐ってるだけ雨祇園
ここをこう曲ってこおと名所図絵
ほんとうのことといいださぬうちに暮れ

岡山県　浜田久米雄

酒蔵が建つほど飲んでまだも飲み
肩組んで歩ける友がいてくれる
散髪をしてお色気がちと戻り
晩酌のある夜詩情がふいと湧き
終点を知らずあくせく稼いどり

大阪市　山川阿茶

屋上のゴルフ物干移転させ
舞の会切符買わせた顔もせず
現代へ私の物差し古いのか
凧とりまず子凧がひっかかり

クラス会

年とってみんなの顎が小そうなり

大阪市　金井文秋

なれ過ぎて犬来客を告げもせず
注文のポーズへ個性出ぬモデル
貧乏性宿の蒲団に寝つかれず
ちょっと助けてやと一本抜くビール
アドバイスだけで落目に金貸さず

東大阪市　久米奈良子

書塾（二句）

書熟静まり一斉に筆動く
帯うまく結べぬ日よ恋のあせり
ふと鏡覗けばいつのまにピエロ
一周り大きくなって過去を断ち
透け透けルックわたしに遠い夏が来て

青森県　工藤甲吉

太陽と空気がただでやっと生き
戒名はなんとつくやらヘソ曲がり
三十年いまもささくれ立つ夫婦
退院をした日の垢は面白し
ハマナスの花北国の海となる

大阪市　不二田一三夫

「現代」という〝兇器〟の中で寝起きする
ボクに似た雑種が駅からついてきた
無名作家タカ派の妻にムチ打たれ

寄席（二句）

八十五歳の林トミさん引退
文化財六十年の引き祝い
「極楽夫婦」テレビに生きる寄席ばやし

大阪市　神谷凡九郎

あの頃を話す今日の笑顔です
知ってますとも云えず週刊誌の知識
平等がここに来てさえ墓地の格
負けている証拠ことごと気にかかり

西宮市　野呂鵜汀

団体はピョコリと拝むだけで過ぎ
カーテンで恋は遮断をしたつもり
ここからが色街となる日和下駄
その後は気楽に盃をさし返えし

松江市　中川晃男

鳥居くぐってから善人の顔になり
吸取紙胸の想いを逆に取り
裏切られながら信じている強さ
弊衣破帽からアノラックヘルメット

奈良県　麻生アート

ノータイがいつしか主義のようになり
雀チュンチュン生きとし生けるものの声
老という字の実感が迫って来
今日も明日もぶっつけ本番で生きてます

高槻市　若柳潮花

紫が好きむらさきの似合うひと
水くぐる鮎へ紅葉の影が落ち
ひいきとも弟子ともつかぬのに困り
物好きな男の膝の稽古三味

大阪市　児島与呂志

花の色原色に成り夏近し
馬鹿ふたり二十年をば笑うて来
長女二女三女を並べて見たものの
生けのエビ値段気になる妻あわれ

大阪市　酒田清子

（北川春巣氏を院長に迎えて）一句
院長の好評心の中で拍手する
白黒があるから人生張りがあり
いざこざを煎じつめれば世代の差
無意識に呼吸する人の羨し

奈良市　村上春巳

巡礼の一人拾うてバスゆれる
人間に立ち向う鹿の母性愛
何願う女の素足二月堂

奈良県川柳大会
薬師寺のしぶ茶句作の小半日

宇部市　平田実男

亡き父の自慢で父の日母が酔い
着替えても蠅魚屋を知っており
二代目の実力知っている株価
妻までが教育ママになり下り

笠岡市　出原真奇

三ちゃんへ御苦労さんと鳴く蛙
研かれて埋木床の間で光り
隣りより一日早く咲いたバラ
雨降れば雨の歌あり保育園

大阪市　大坂形水

場違いの人と話していてヒント
借り多い自分に気づくのも齢か
放任主義などと父親弱くなり
帰途コース観光バスは皆眠り

美禰市　安平次弘道

職業に貴賤はないがさりながら

月並な言葉の端にある誠意
胚に傷あって総会屋へはずみ
現実と夢のギャップの離婚沙汰

岡山県　大森娯句楽

歳甲斐もなく元気づき誘い出し
素通りが出来ぬお女将は野暮でなし
つかぬ事お尋ねになる聞き合せ
死ぬるまで明日への為の今日稼ぐ

奈良県　西辻竹青

十指十目孔子のおしえちがいなし
まとめ役もらって妻の苦労性
ご散策皇后さまがつきたまい
皇室アルバムこんな平和がほしくなり

八尾市　高杉鬼遊

秒読みに似て駅までの朝を出る
酔いの渇きへ勉学の子が起きている
飛び上ってみたが噴水落ちてゆき
ご愛顧に応え欠陥車を発表

ハワイ　上田紅渓

日本着が点をかせいだ同じのど
若き日の思出朽ちる古長屋
私築も勤労奉仕で落成す
招魂祭忘れずに咲く山の百合

倉敷市　小幡里風

濡れ衣を着たまま青年昼の酒
大阪に負けて農家を継ぐと云う
太陽にふと窺かれた男泣き
野良犬と本気で喧嘩酔うている

鳥取県　清水一保

せち辛い世だと螢もさびしい灯
金だけで足りず若さもほしくなり
許された命の限りぼたん咲き
飲む口と知って隣と入れ変り

倉敷市　野田素身郎

勝てないと分かってからの代打です
自由席に一人立ってる馬鹿らしさ
食堂車を窓越しに見る通勤車
里からの友をいたわる国訛り

岸和田市　葛城伊三郎

野次馬にホース向けたい火事現場
シグナルの青待っている五月晴
膝立てて片足宛の爪を切り
撮ってから心に懸かる心電図

大阪市　木村水洞

なるようにならず新聞記事になり
栄転へ下戸もジュースで手をたたき
ひっそりと日暮れる雨の二月堂

法隆寺
国宝も凡人の眼にただの像

神戸市　仲　どんたく

紅つけて稼ぐベビーのミルク代
病院の窓に人恋う顔と顔
父の日も昼寝をしたいだけの父
山に居を構えて街を睥睨す

今治市　越智一水

聞き流しそれでことすむ妻の愚痴
美しい嫁働かぬように出来
大きな炙点母の背がまるい
生存競争子との対話をさまたげる

守口市　村田瓢太

造成の迫り来る田も田植かな
雨男気恥かしくなるほどの晴れ
白黒じゃ惜しい京都の春の色
口先はようこそ遂に茶も出さず

大阪市　西出一栄

へらへらと今日は姑五月晴
影法師下手な踊りにつきまとい
右へ行こか左へ行こか易へ寄り
体裁ようチャンス外して金を貯め

名古屋市　吉田水車

売り上げは五桁に満たず日が暮れる
ポンコツ車栄枯盛衰を目のあたり
思いきやしっぽにあったえびの味
停年は話があるにギョットする

大阪市　本多柳志

人間の野性はだしのこそばゆさ
金のない意見の筋が徹りすぎ
昼窓を閉めて冷めたい人が棲み
己惚れと見栄で重たい市場籠

竹原市　山内静水

万歳三唱二三日声の出ないまま
皇居の広さてくてくてくてく足で知る
道灌堀のぞけば花とまがう鳥
恩賜の煙草に戦場よみがえる

諫早市　川岡霊眼子

よく見れば寄席万才に似た夫婦
隠栖はしたが炎は消えやらず
実るほど刺で護りて麦稔る

なまじっか素性よい木に継木する

岡山県　直原七面山

家も田も流した憎い水が引き
息とめて叱る言葉を探す父
赤信号へ犬も坐って待つ積り
雨のち雪どこか狂っている四月

倉敷市　水粉千翁

すり抜けて風は涼しさねぎらわれ
芝居めく不安はな緒が切れたとさ
あるゆとり鍵をかけ忘れてしまい
四海波静か安保へ待ち伏せる

門真市　福島鉄児

妥協案酒宴の隅で囁やかれ
云い足らぬままに別れてそれっきり
衣食住足りて何かに飢えている
マイカーの月賦残したまま事故死

愛媛県　村上旭童

一円がいる日一円見あたらず
米価据え置き物価も右へなろてほし
父ちゃんはねてます昼の酒のんで
五月雨へ雨読のさたでない田ん圃

鳥取県　森田布堂

ちっぽけな俺を見つけた秋芳台
田舎駅田植えが汽車に尻を向け
ラーメンをロハで食うてる調べ室
旅先で聞くふるさとの唄のよさ

ハワイ　羽佐間柳葉

訃報聞く度毎思う俺の齢
日の丸があるのに赤旗振りまわし
里帰り朝寝をそっとして置かれ
落ぶれて前歴なんて野暮な事

大阪市　水谷竹荘

忘れ物したばっかりに事がばれ
男舞いすめば女の眼にもどり
旅に出ていたわりあうも老夫婦
日本のよさは着物でかしこまり

兵庫県　磯野与志

病院にて

病院はこんなに奥の深いとこ
絶食の今日のベッドの高いこと
配膳車僕の部屋だけ通りすぎ
スイッチも切られ安静時間です

兵庫県　河原みのる

悲壮とやいわん男やもめの身だしなみ

ふじやまと月は遠くに見るべかり
受けがよいとはつまりお人好し
　おついたち詣り
石段を聖火持つ気で試してみ
　出雲市　尼　緑之助

裏成りの呼吸それでも若き
ごねどくの味方に高く労働法
戦捷碑邪魔にならないとこで無事
トイレ満員お城は旅行団
　倉敷市　木村千容

ここら辺にこう芽がでればなと思い
脚下照顧去年の傷跡なでてみる
漬物の重石捨石の過去があり
　自祝を慶した八十二回目の誕生日
さき競うさつき晴れかやたん生日
　大阪市　石倉旅風

あちこちの絵はがき届くのも五月
ゲバ棒の仲間にはせん鯉のぼり
ネクタイを締めて男が出来上り
波の音わが人生をわらうまい
　倉敷市　藤井春日

転勤へかげから見送る女がおり
先様のおのぞみ連れ子で式を挙げ
家計もう切りつめられぬと居なおられ
御苦労と云えば賃上して欲しい
　桜井市　岩本雀踊子

もったいない妻だと他人様が云う
涙一つ見せぬ女が目をつむり
冬眠の蛙へ土をかけてやる
ささやかな虚栄をうつす三面鏡
　大阪市　天正千梢

豊かさは物質外を求めて居
忘却に救われ横着者になり
窒息の原因会話のない家庭
神様にお腹をかられて一人ふえ
　西宮市　島居百酒

夜更けまで飲まして元凶にされるはめ
賞品を女物にしてまるめる気
たかが金それが無いので命がけ
鷹生んで隔世遺伝にされちまい
　和歌山市　垂井葵水

相性の公約数にない二人
葉もれ日も鬼ごっこの脊を走る
杯をもてば話しのわかる叔父

美しい人と一緒に出た欠伸

富田林市　岩田美代

真実の主語がないので目をそらす
倖せな貌こしらえて招かれる
おみくじをシエカーのように振って吉
株が好きで色気に入るすきがない

枚方市　宮川珠笑

団体の下見麻雀部屋も決め
酒のめばママにハイハイなつくパパ
ビジョンには遠く内職肩がこり
プロポーズ粉骨砕身稼ぎます

平田市　久家代仕男

孫がみな勤め動けぬ母となり
よっぽどの決意は僕に嫁が来る
やがて来る妻へ引継ぐ茄子を植え
頼りなさ枯枝足場にしてるよう

熊本県　有働芳仙

実らない恋がいくつもある日記
上ばかり変り人事の底に生き
人柱出ぬと政治が動かぬ世
公害へ政治は渋い腰をあげ

下関市　桜川不水

肩叩き百ずつ代るいい余生
げんまんをして夕焼の子が別れ
寝せつけるように移植の土を寄せ
罫線を引いて楽しむ売らぬ株

愛媛県　渡辺暁童

自動車の運転なさる髪かたち
久し振りちと楽かとはきかれまい
年頃はうしろ姿に油断せず

還暦近づく
衣飲住ちと年寄りを見習わな

京都府　大鶴喜由

テレビとめてこれから対話父と子と
俄雨来そう風鈴しきりなり
草と花ばかり余生に逆らわず
勝つための対話と知って父黙し

竹原市　小島蘭幸

見えすいた嘘を許して男去り
苦難の連続でしたと笑う花ばさみ
憎らしい奴言うだけのことはやり
嫌いだよみんなにもてる君だから

伊丹市　小川静観堂

また死なすに忍びずやめた金魚

デラックスにかえて往診尻軽う
この前とおんなじような二度目の恋
落書もアンコールワットのは珍重

堺市　藤井一二三

片想いでもよし今朝の軽い靴
土俵際にきてあれこれと欲を出し
マンションと言えば生活がよう聞こえ
つり革に魚臭も乗せて赤字線

鳥取市　河村日満

母の日に（一句）
足して買うてというプレゼントことずかり
次郎長もうちとおんなじ紋ほこる
握り合う手を見ぬふりで話しかけ

高槻市　福田丁路

水虫の他に悩みのない身なり
利の高い金は気楽に貸してくれ
鉄筋になったお寺の味気なさ

大阪市　中川滋雀

大器晩成惰性の靴を履くとする
九階まであるのに入院ままならず
満ち足りた日の寿と書いてみる

大阪市　河井庸佑

こわいもの知らず若さで押しまくり
いい年をしてとの陰の声知らず
ずけずけと言うても通る椅子がほし

松江市　小林孤呂二

再婚の噂さの人の芸達者
たまさかの参観日の父隅におり
反抗期夕食ぬきを案じる日

鳥取県　田中蛙眠子

春斗の帰り野点の客となり
下駄の音響かぬ橋に架けかわり
軍歌よし農奴の田植仕舞酒

呉市　林野甦光

しとやかに美人が詫びて事が済み
卑怯者にされて離婚のケリがつき
母代りするパパ今日も酔うている

岡山県　田村藤波

シームレースはいて人並の足にする
一の字に結んだ口に言い寄れず
ライバルの店を横目で見て暮し

京都府　清水谷句楽坊

阿呆坊主有無ミックスし今日も座し
無一物看板にして拝観寺

お手のない仏まで出す拝観寺

倉吉市　奥谷弘朗

下心あって女将の貸した傘
頼れるは自分だけとは淋しすぎ
スローガン多くて焦点ぼけて来る

尼崎市　高津徹也

春風へ小さな虫を発見し
もらい物またも小言を云いそびれ
ポイントへピントが決まる実業家

岡山市　川端柳子

テレビだけ語りつづけて主婦の昼
税金の上げ底とってボーナス日
聞き流す言葉よどみに耐えている

大阪市　宮尾あいき

よい伴侶射止めた二人へ五月晴
逢う人の好みに合わすうす化粧
うちのママがきれいとゆずらぬ孫同士

鹿児島市　土岐トク子

人情が抱え切れない土産もち
羽がい締めされても負けと云わぬ顔
おそるおそる通知表ママの顔に出し

堺市　新谷笑痴

けが人も出して都会の螢狩り
山肌を削れば坪で評価され
お守りの角すり切れて児の育ち

大阪市　宮地双楽

アルバイト日給だけの汗をかき
ベランダの鉢に集まる梅雨日さし
父の日に息子夫婦が養老院

兵庫県　大江秋月

色白になったと病後いたわられ
電灯がポツンと無人駅暮れる
仲人に仲の良いとこ見てもらい

松江市　岡崎祥月

大雨が降ったと見えぬ丸い月
巡視する夜空きれいな月と星
生活設計算盤玉が動かない

熊本市　楠田ひで子

急停車安堵した目で叱りつけ
癌年令ふとよぎるかげの咳をする
テレビ料理あんなお鍋が欲しくなり

笠岡市　松本忠三

春斗が煮えず赤旗梅雨に濡れ
団地からあの世へ叔母も淋しかろ

片言の坊や母ちゃん死んじまえ

大阪市　西川誓二

ひねくれてまともに聞けぬ言葉尻
泣き言に相槌打てば付け上がり

妻一泊旅行

三食と昼寝に飽いて気まま旅

大阪市　福井野迷路

苔寺

行春を芭蕉に学び庭に立つ
古い俺新しい俺と相挑む
犬ホテル一泊二食二千円

和歌山市　野村太茂津

女性上位何くそ俺だけは俺だけは
色褪せて相性なんぞと云うとれず
袋掛実りを祈る手つき見せ

久留米市　永松道雄

羽根ひろげ飛んでゆきたい紅孔雀
不意打の検査かくせぬ青い顔
清流に育つ豊かな鮎の味

笠岡市　木山要次

褒めてやれば飴に涎を添えてくれ
不用意な言葉を呑んだ咽喉仏

ポケットを探れば孫が呉れた飴

芦屋市　丸川初甫

新歌舞伎座「伽羅先代萩」

政岡の点前に若君腹がへり

新歌舞伎座「国入奴」

花の槍持って酔うてる伊達奴

新歌舞伎座「三人石橋」

花に酔い蝶に狂うて舞い終り

守口市　羽原静歩

妥協した瞼の底に母がいる
ふられても泣いてもやっぱり舌を出し
いもづるとなって汚職の影法師

宝塚市　小畠無聖

鯉のぼり風の姿を描く空
柄のとれた鍬だけ残る農繁期

神経痛にたえて

いまさらに偲ぶ尊さ隻手の句

大阪市　室谷鉄舟

シャッターを閉めて一日感謝する
涼しさを盛った座敷でかしこまり
この歳になってかたぱんなおるかい

大阪市　今西章雅

ドーナツ現象建売田植のよう続き
ホーホーと三面記事を読む平和
ねっからの酒好き夏でも燗で飲み

奈良市　宮口笛生

晩酌に妻へすすめている平和
朝からの酒上棟の木の香り
無縁さんにも供えて帰る墓参り

松江市　舟木与根一

片手間で先祖にすまぬ田を守り
やりくりをして見栄を張る内助の功
流行の柄をP・T・Aで知り

京都市　都倉求芽（求女改め）

あじさいの本心朝露だけが知り
休憩をしても同んなじだけの汗
立ち話こぼしてひがんで自慢して

松江市　柳楽鶴丸

一時間でいいから地球廻らないで
コンピューターが何んだ愛する二人です
昭和元禄犬騒動の英国版

岡山県　坂井三葉

批評した顔がカンパへ金をなげ
確証を掴んで刑事の軽い足
雑布になって亡母の香を残し

鳥取県　谷無閑

寒山枯木娘三人嫁がせて
孫二題
得手不得手甲もあり丁もあり
算数は弱いが金はよくせびり

堺市　伏見茂美

札所巡拝
御詠歌は知らぬが参る娘の供養
愛のかたみ遠くへ去りし人に似る
元栓も電気も消せと妻の旅

岡山県　藤原秋月

蚊の知恵は蚊帳の破れを知っており
幽霊の出たとこ団地の灯がともり
風鈴で我慢クーラーまだ買えず

大阪市　横倉富久一

体制と云う檻四角い空を見る
眠る金ある日毒薬より恐し
働けば食えない上に税が来る

和歌山市　土谷城石

倦怠期ぽつぽつ相性気にしだし
アベックも離れ離れになる人出

人出をば見込んだ天気降り坂
小松市　四方天弘実

景気いい話段々でかくなる
悔いのない一日だった飯の味
最高裁無罪血税又くわれ
堺市　高橋千万子

老人会明治の話ぶっちゃける
留守居する母はやすまずたすきがけ
条件がよすぎて替え玉思案顔
姫路市　隠岐不酔

嫁きおくれきらい文句をまだ並べ
おこる気じゃないが笑えぬ子の無心
高石市　谷沢好祐

子等は皆巣立ち翁は夜警する
ヒトの条件反射を作るCM
岡山県　池田古心

蚊に刺され乍らも夜釣止められず
又明日がなどと呑気者の悟り
出雲市　原独仙

外人の稚児も英語では泣かず
春雨を踊れば費ったねと妓
高槻市　山田季賛

本当を言いそびれている肩を組み
泉佐野市　大工睦夫

雨上り若葉に遊ぶ珠一つ
日めくりもめくらず自由ない暮し
和歌山市　西尾公作

妥協する心覗かれすねて見せ
ハイボール女の妬心透けて見え
岡山県　横山一声

薄給の机に札束山と積み
薄給をとるのに高級服がいり
東大阪市　竹中肖二

借らいでは損と融資を申し込み
鉄骨へ窓貼り付けてビルとなり
東大阪市　竹中綾女

紫陽花に雨ささやいて花を撫で
京の街歩き疲れて家を恋う
加賀市　細呂木魯木

蝶一羽ビル街に迷いつかれ果て
余命を知ってか蟬の鳴きっぷり
八尾市　古川鶴声

共稼ぎ落ち逢うとこは立ち飲みや
同情はするが手許はおけらです
小松市　馬場魚山

就職の便り給料の事も書き
高くなっても鰯客用にはならず

★

菊沢小松園

炊煙のための筆とは思わざり
拗ねて居る猿は餌には有りつけず
金泥の剝げたは知らぬ仏の眼
逆輸入母国の土で咲かぬ花
太陽にゆうべの無理を笑われる

清水白柳

雑念の中の女は脱いでいる
テンポの合わないフイルムの兵隊さん
距離を感じて友達に電話せず
　梅里さんの二年祭に捧ぐ
大万の栄え見守る雲の峯

川村好郎

責めているから反抗だけかえり
汗だくに円周駈けただけの老い
後輩のくせにと既に負けている
　松江梅里二年祭
返盃もしないが遺影うれしそう

西尾栞

　土肥温泉にて
明日乗る汽船をみている宿の窓

新婚さんやなァと旧婚の目たのしそう
小皺啣てば責任のある顔という
デパートで金魚見ている待ち合わせ

北川春巣

空港ビル女はみんな美しい
情報情報折り込み広告ようたまり
定退後会うたら顎に無精ひげ
つながれていつか吠えない犬となり
　級友急逝
櫛の歯が一枚欠けた身ぶるいす

若本多久志

そっとしておけ月は見るものぞ
　三千院にて
弥陀三尊青葉の蔭に微笑給う
　同窓会
あれも死にこれも死に雑草の同窓会
九十まで生きる気焔に酒をくみ
　I・B・M東京支社にて
はじき出す十年先の我が宿命

人類が月面に立った夏！

暑中お見舞い申しあげます

山や海

高鷲亜鈍

山や海若いいのちのインク消し
紫のなすび歯に染む胸に染む
なによりも耳たのします秋の虫
メロドラマ泣け泣けめくら純情よ
子らまでがチンチクリンを責めたてる
色即是空空即是色がややわかり

黄金色の酩酊へ秋の風
朝顔に夕顔に指ぬれる

★ 原句をたしかめて

麻生葭乃

七月号特集のなかで、潮花氏の原稿中にある路郎の一句は「だしぬけに鐘が鳴るのも旅のこと」と御訂正願います。潮花氏は「鐘を聞くのも」と書いていられますが「鐘を聞くのも」では単なる叙事句で終ります。「鐘が鳴るのも」とすれば韻々とつたわる鐘の余韻が感じられます。どんなに自分が好きだと思った句でも心覚えの句はキット間違っています。

私は或る雑誌に選評の例句として好郎さんの句を拝借した事があったのです。それは好郎さんの「桜なら堺刑務所今見頃」というのですが、急ぐ原稿ったので確めることもせず惚れ込んだ句だから間違いなかろうと書いたのが「桜なら堺刑務所今盛り」だったのです。後で「今見頃」だと知った時「シマッタ」と私の良心が叫びました。

サッと冷汗が出ました。「見頃」の方が句に含みがあります。それ以来咽から手が出る程欲しい例句でも原句を見ねば書かぬことにしました。

八木摩天郎さんの原稿にある路郎の一句「お父さんは川柳々々云うてるよ」は「お父さんはやはり川柳々々云うてるよ」に御訂正下さい。それから亡き長男ロンドンを憶う句が並んでいるうち三句までは路郎の句ですが後の五句は私の句です。下に記名がありませんから「旅人」や「福寿草」をお持ちでない方がはじめて御覧になったら、みんな路郎の句になってしまいます。それでは路郎が困ると思うのです。句はその人の生命です。どこまでも大切にしたいと思います。

（注・前号高橋操子さんの〃子沢山俺のまくらはどこへいた〃は「僕のまくら」が正しい句です。編集部）

川柳日記

麻生葭乃

六月の句

プレハブの庭サンプルの花が咲き
空ら財布一に一たすこと知らず
聴覚も多角形なりテレビとラジオ
茂る柘榴へ花赤々と雨をさけ
逃避癖不協和音は聞かじとす
としの病いたわり合うている電話
九尺二間のかどのマイカー邪魔がられ
上六へ各停がおばあちゃん拾ろて行く
上六へ屋根　屋根　屋根のつづく窓
梅雨晴れへ鳴るは川風河太郎

川傍柳初篇研究

（七十四）

前田喜代人　川端柳風
岡崎重義　故高須唖三味
清　博美丸　十府
藤井和雄　岡田甫

569　寄合へ四八斗りの娘来る　一甫

清＝「四八ばかりの娘」は四掛ける八で、三十二才ほどのというような年頃で婚期を逸した娘。こんな年増の娘だから、家人に替って寄合などにも顔を出し一人前の意見も述べる。

金っ食ひ四八ばかりの娘なり　筥一・17

藤井＝お留守居役の屋敷の寄合へ三十二程の振袖娘がよばれて来たのだろう。町内の寄合にオールドミスが親の代理で出るわけがないから。

川端＝藤井説に賛。寄合は集って相談することで、ここは芸者でも呼ぼうとの相談が決まって、三十二才ぐらいの踊り子が来たのであろう。

高須＝寄合はヨリアイで集会のことだが、ここはお留守居役の例会。別に大事なこともないので、お酌に踊り子が呼ばれる。それが「四八＝三十二」ばかりの踊り子だというわけ。

前田＝礎稿に賛。「お留守居役」の寄合とまで考える必要はないと思うが。

丸＝藤井・高須説賛。

岡田＝近松の浄ルリの文句に娘を形容して「二八ばかりで憎からぬ……」とある。十六才ぐらいになるとソロソロ色気が出て来て可愛らしくなる。四八はその二八をしゃれた大年増の形容。それも娘同様に振袖姿の大年増となれば、踊子（芸者）と限定される。踊子は二分（一両の半分）の高値だから、普通人の寄合などに呼ぶわけには参らぬ。キャバレーなどが大会社の社用族に現代では利用されるように、踊子を集会に呼べるのは当時の社用族。諸侯の外交官であった御留守居役を必然的に限定される。

570　**ためきって嫁鎌くらへいつ付る**　長笑

清＝がまんにがまんを重ね、その上がまんがならず、婚家を飛び出した嫁の行き先は鎌倉の東慶寺。

藤井＝ためきってで、せつなさを示している。

高須＝「いつ付る」は言いつけるで他人に言うこと。すなわち告げ口で、ここでは東慶寺へ駆け込み訴証をする。それが「溜めきった」ことで、がまんにがまんしたこと——というのである。類句が多い。

岡崎＝賛。「親子していびりましたと松ケ岡」（明六桜4）

丸・岡田＝賛。

571　**野がけ道嫁なんじうな事が出来**　一甫

清＝ハイキングに出かけた若い嫁。途中でもよおしてきたが、公衆便所などのない江

戸時代のこと、やろうと思えば野雪隠以外に方法はない。難渋なことに違いない。

高須＝船と野がけが、嫁（または娘）には難儀なことが一つある。生理的排泄作用である。

　野がけ道おりふし連をなくす也　三三・8

その同伴者が排泄をすましてサバサバした顔で、追いついて来るのも間のないことであろう。

丸・岡田＝賛。

572　**二条あたりへ豆いりや犬っころ**　嵐弓

清＝不明。

川端＝「大阪といゝたい所へきらず桶」（傍一・1）の類句か？不詳。

高須＝「雛の段五条あたりは真ッ裸」（安四智6）で豆煎りも犬張子もゴチャゴチャと置いてある。それも女の子の楽しみの一つ。今なら、いろんなコケシをならべる。雛段を洛中に見立てて壇の下の方を「五条あたり」と言っただけの句であろう。皆様お考えすぎかな。

前田＝「雛じたくほうらく売もしたくする」（一九23）があり、「豆いり」が雛祭り用に使われたと思うが、「豆いり」の句には炙饗に用いられたのが多いと「犬っころ」が句中にあるので、やはり不解である。しかし「五条」が雛段をさす類句でもあれば前説に賛成する。

丸・岡田＝高須説、御明解。

573　**ニッ三ッしづくをふって菖蒲みせ**　眠狐

清＝「あく迄ぬれて蓬菖蒲やせうぶ」（傍一29）と雨の多い季節の商売ゆえに、商品である菖蒲も濡れている。「二ッ三ッしづくをふって」と、ぼんやりしていれば見逃してしまう動作をたくみにつかんで詠んだところ佳。

藤井＝賛。生きた句心。みせは「見世」でなく「見せ」だ。

高須＝菖蒲を買うにも、女気のあれこれと迷う。「ちょっと、それを見せて」と言う。菖蒲売りイヤとも言えず雫をきって見せる。あながち雨の中を売って歩くと考えずとも、切って来た菖蒲の生キ生キと水々しい情景とも考えられるが、時は雨期、雨の中を売り歩くと解しても、ムリ解ではない。

丸＝諸説につく。川柳不易の句といいたいが、現在もうこんな情景は見られなくなった。

岡田＝賛。旧の五月は今の六月にあたる。梅雨期だから、菖蒲もぬれているのだ。

574　**ほうばって女房をじらす雛の菓子**　燕子

清＝「女房をじらす」だから、つまみ喰をしたのは亭主。折角の雛祭に、こんな親父をもった子供が可哀そうと、母親は腹を立てる。しかしありそうなこと。

高須＝「白酒どろぼう娘笑い〳〵追い」と同巧異曲。どろぼうが小さなワカラズヤなら「雛へ艾を置くは姉の智恵」（一一30）で済むが、大きな腕白ならそうもならぬ。「雛の座敷から男はおし出され」（一三21）で、兄も弟も、もちろん亭主も、みな洛外へ追放令が出されるのである。

丸＝礎稿に賛。しかし亭主もいたずら半分

岡田＝賛。「じらす」だからわざとしたイタズラ。

みんなの暮しが明るくなる
セキスイのプラスチックス
積水化学
本社　大阪市北区宗是町1

ある敗戦日記抄

東野大八

敗戦記念日の八月十五日がやってきた。
今回は大陸ものを離れて、ユーモラスとペーソスにみちた一庶民の敗戦日記を紹介しよう。筆者は小室健夫。この人は豊田通商の副社長だった人で、私とは個人的によくおつき合いを願った。昭和四十年秋〝亡妻長子にささぐ〟として、自費出版で〝子らは召されず〟を刊行、ごく親しい人々だけに配布された。夫人は閨秀歌人として知られ、敗戦と同時に

「敗戦の掟は如何にきびしくも、今はやすけし子らは召されず」

と一首を詠じ、疎開先の夫君に寄せ、小室さんの虚脱感に一まつの火を点じられた。

小室さんは、この愛妻の追悼記を出版後、程なく夫人の跡を追われたが、私は、ささやかな非売品のこの本を手に、終戦の夏がくるたびに小室夫妻への愛惜の一ときをすごす。以下はその抜き書である。淡如たる筆致によく故人の人柄と、往時の敗戦ムードが描出されており、なかなか名文である。

敵機頭上に迫る。忽ち路傍の防空壕にとびこむ。手さぐりで奥へ進むほどに、手先に棒の如きものが触れる。両手でさぐり上るほどに突如声あり。「妾の足ですよ」

―二〇・四・二一―

防空壕に入れておいた鞄二個助かる。あけてみれば燕尾服、モーニング、紋服など戦時下不要のものばかり、どうしてこうも頭が悪いのだらう。

―二〇・四・二三―

長州からきた男の話。通し切符を売ってくれぬ。百キロずつ切符を買替えて乗継ぎ豊橋まできたが、この先何日かかるか判らぬ上、食糧も缺乏してくる。ええい、どうにでもなれと、無切符で乗越してきたら、車中満員で検札もなく着駅上野駅は大混雑で、そのまま改札口を出た。切符など買うものではない。

―二〇・四・二四―

六十歳まで国民義勇軍に編入されるとのこと。自分の如き老人（五十三歳）が果して何んの役に立つかの問いに対し一軍人答えていわく「適当な役目がある。爆弾を仕込んだドラム缶に身を潜め、敵の通りすぎる際引火する」

―二〇・四・二五―

私の将来の旦那様、断然小食の人でなければとは嫌だと娘どもの真剣な言い分なり。

―二〇・五・一九―

空襲が遠のくと何か物足らぬ気持がする。一種の戦時病症というべし。

―二〇・五・二一―

三井家の令嬢、生来初めて洗濯する、然しそれを庭内のお稲荷さんの鳥居に干す。

―二〇・五・二八―

月光の美くしきは誰人も之を知る。その如何に有難きかは焼跡無灯生活者にしくはない

―二〇・六・五―

久しく悩みしクギと燃料の不足難、焼跡からの供給、とみに潤沢となり目出度解消する。

―二〇・六・一二―

一消防署、消防車もろとも全焼す。付近の火事は必ず早期に消火すると平素高言しておったが、余り近すぎたためによる。

―二〇・六・一三―

焼跡生活、最大のぜい沢、自然の大形丸石一個を石がけよりとり外し、そのくぼみに大書院の柱たりし木曽御料材出材の桧の焼け棒杭を惜しげもなく焚き、その上に薬缶をかけわずか残りし玉露を毎朝することである。この一杯の茶の味、利久も羨むべし。

―二〇・六・二一―

一婦人電車上の車掌を見上げていう。「この電車、新橋までお越しですか、乗せて戴けましょうか」制服バッコ時代なり。

―二〇・六・二四―

買出しに一番よいところはどこかと問えば取締りのお巡りさんにたずねるのが一番早いと教えてくれた中年女あり。

―二〇・六・二五―

毎日読みものに困る。幸い事務所に保存してあった諸方より来信数百通あり、これをいちいち丹念に読む。このごろの間に合わせ出版物に優ること万々、興味津々たり。

―二〇・六・二六―

親子丼四拾五銭、うなぎ丼六拾銭と記した古看板を焼跡にみる。罪深し。

―二〇・七・一五―

進駐軍が上陸して間もない時、ママが病院入院中の弟のところへ、両手いっぱいに荷物や食糧を持っていく途中、ネギ一パイ積んだ百姓車にあい、ネギ三貫目を買ったわよいがMPがいたのでその足下におき、帰途サンキュウといってそれを持って帰った。この話に娘「まあ、よういわんわ」日本の大臣をみんな女としたら如何。

―二〇・九・三―

買出し列車は超々満員、毎日ふり落されて数人死ぬとのこと。危険だからやめろといわれた女房いわく「買出しに行って死ぬかもしれんが、行かねば確実に死にます」

―二〇・二・一―

「なる程、此処は貴方の住居の焼跡です。しかし、私が既にトタン小屋を建て畠も作っております。未開墾地を開墾した者は十年間使用の権利がありますので、貴方が家を建てようとなさってもダメです」

―二〇・一一・一九―

家族の居住する木曽路の町、銀行に新円十分に配布されず規定の一カ月三百円の生活費も半分より払出してくれぬ。戦災者に対する特別払出しも問題にならぬ。本日着の妻よりの来状にいわく「自分のハイヒール数足、その他の靴、長男が名古屋へ売りに出かけた。売れればよいが」

―二一・三・二二―

「筆にのみものをいわす日や春寒し」果して俳句になっているや否や、介するところに非ず。

―二一・三・二四―

先月五日散髪して以来約一カ月ぶりで散髪する。乏しい身体の栄養分を吸収して折角伸びた髪をなぜ、新円を払って刈らねばならぬのか。

―二一・四・二―

世田ケ谷に住む男いわく「来る四月十日の選挙に区役所へ行くのに電車賃一円八十銭を要する。新円時代にばかばかしいから棄権する」

―二一・四・三―

市ケ谷付近の外濠「魚釣るべからず」の立札を後にして数十人が糸を垂れている。立札の方がまちがっている。小供が小ブナをみせて帝大の池で釣ったという。番人に叱らせんか、というと、その子供「叱られたら逃げる。番人は絶対おっかけて来んよ、だって栄養失調になるから……」

―二一・六・一一―

本郷の一薬房、表に貼紙あり

「体温計貸します」

あるバーに貼紙あり

「ビール買います」

―二一・六・二五―

女房より来信あり「配給の木綿で前かけや子供のサルマタを作って売ったら百円ほどになった。末の子が、おうちはどうしてこうも貧乏なのとたずね、返答に窮す」

―二一・六・九―

川柳の「も合い傘惚れた方がたんとぬれ」を米人がどういう訳かときく。また、彼等の宴会で「独り寝るのは寝るのじゃあないよ、枕かついで横に立つ」を英訳させられた。ナマかじりの日本語を知る米人のお守りはシンが疲れる。われ高級ホーカンの如し。

―二一・六・一〇―

食事の際、九州から特に取り寄せたとって置きのウニ一瓶を出す。お客はモリモリ喰って一人で空にして仕舞った。その揚句、一体これはなんですかときた。何をかいわんや。

―二一・六・二三―

米の闇値段、過日まで六十五円であったものが今では百円でも手に入らぬ、高いといったら「このごろは一日平均二升よりもち込めぬ。危険料も込めて日当七十円は貰わねばたちゆかぬ。百円でも割がよくない」先方はそうかも知れんがこちらは納得できぬ。

―二一・七・二〇―

超々満員電車の中の一人の男、水ばなが垂れるが手を動かし得ず、前の男の外套の背でこれをぬぐう。前の男、それに気づいて怒ったが、これまた振り向くことができず、両人原姿勢のままで口げんか。武力に訴えぬところはなはだよし。

―二一・二・二五―

秀句鑑賞

…前月号から…

清水白柳

下向いて歩けば一人だけの道

時広一路

雑音には一切耳をかさず、ひたむきな信念で自分の道を進むことが出来るときは一番幸福なときであろう。たとえ他人からはそしられようと、笑われようとそんな事には気をとられないで進んでゆくには、キョロキョロと見まわしていてはいけない。そんな気持がこの句を生んだのであろう。そして一人だけの道はしっかりとした足どりで踏んでゆく幸福への道であってほしいと思う。

落葉踏む足音だけが僕のもの

羽原静歩

静かな環境を求める心は都会に住むもののだれもが持っているものである。信心のためであれ、レジャーで出かけた温泉宿をはなれた谷間であれ、ひとりになって落葉を踏むのは心を洗われる思いがする。その足音が自分を仙人にしてくれるようなサク覚さえ感じさせられるのもたのしいことである。

捨てた車券踏んでもゼニの音はせず

和田痴亭

いつかテレビで捨てられた車券が風に吹かれて吹溜りのようになっている場面を見たことがある。実際に競輪場へはまだ行ったことがないのでそのテレビの場面を頭において書いているのだが、同じ紙でありながらはずれた車券は紙クズに過ぎない。紙幣なら踏むこともなかろうが、捨てられた車券は腹立ちまぎれのトバッチリで痛いナと言うかも知れない。

娘の瞳信じて噂信じまい

福島鉄児

世間というものはとかく平和な家庭が何かもめないだろうかとウの目タカの目で見つめられているものだ。噂を気にして娘に問い質したが一笑に付された。その瞳はいつもの朗らかな生れた時以来の明るさを持っている。それを信じてやるのが親の義務であろう。

ほんものが出て温室は値が下り

小畠無聖

どんな野菜でも果物でも一年中いつでも食べられる有難い御時世である。それだけに季節感がなくなってしまって、促成のものを出されてもそれ程珍らしがらなくなったのも事実である。併し自然というものは有難いもので、本当の味はシュンのものでないと味わえないのだ。それがほんものなのである。

食べられる運命乳牛の雄生れ

村上旭童

雄でなければ役に立たない動物もあるのに乳牛というからには雌でなければ乳が採れないから雄牛はロースになるのが生れた時からの運命だとは何か可愛想な気がする。併しは

磨かれた伝統の味

御菓子司

鶴屋八幡

本店・大阪市東区今橋5・電話(203)7281
東京店・東京都千代田区麹町2・電話(261)3996
売店・各百貨店のれん街

らますために雄も必要なのだから以て冥すべしか。

足止めのために農家の自家用車

弘津柳慶

久しぶりで出かけて来た友人を歓待して一杯はじめたのだが、交通も余り便利でない田舎なので早早に帰りたがるのを、マア落着けや、クルマで送るから心配するな、と引止める口実だけに買うたのではないのだが、少しはヒガンでもみたくなる農家の財政ではある

混浴と聞いて眼鏡のまま入り

谷垣史好

いつもは浴室へ入るのに眼鏡をはずすのだが、山間の温泉場で大浴場が混浴だというのでそのまま入ったという心理は面白い。この眼鏡は老眼鏡でなくて、近視眼で中年の男性だとすると尚うれしくなる。

蜘蛛の巣に顔なでられて鍵開ける

竹中綾女

永い留守なのではない。たった一晩家を開けていただけなのに蜘蛛の巣が顔をなでる。都会の中でもこうした経験を持たれる家は、門から玄関まで二米程の前せんざいがあって植木のある家である。蜘蛛の巣といってもホンの二本か三本の糸だけなのだが、だれも来なかったという安心感もあっていいと思う。

口下手の祝辞暗記の甲斐もなし

福田丁路

人の前に立ってシャベルということを苦手とする人が案外多い。殊に平素から口下手と来ては仕方がないが、役目がら止むを得ず引受けたもののアガってしまって何を言ったかわからないままに終ったという経験も、度重なればいつか身につくもので、何事も当ってくだけろだ。

喪服よく似合う妻なり死んだろか

藤本礎山

昔の落語に、後家さんが若い男によくもてるのを見て、ウチのカカアも後家にしたい。というのがあるが、この句もその心理に一脈通じるものがあって面白いと思ったが、作者が病臥中の作品なので、その底に流れる淋しさがサッと心の中を横切ったのである。

俗名で請求が来た医療代

船木史朗

○○院○○居士殿では相手がもうこの世に居ないので俗名で請求書が来たというのであるが、大抵は死亡診断書を書いてもらう時に支払いを済ませるのが普通であるように思うが、余程のんびりした地方の出来事のようで何かほほえましいものを感じさせられた。

良い季節考え事は後廻し

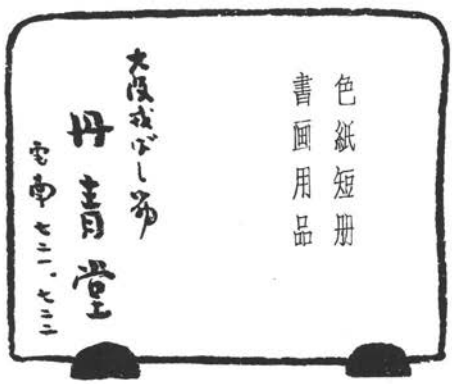
古野伶人

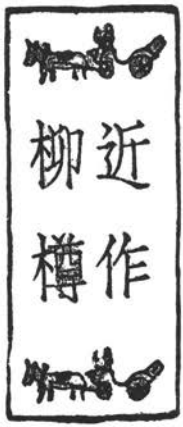
空は青空、肌に当る風もさわやかでじっと家に居るには勿体ない、ともかくどこかへ出かけよう。考えごとなどは帰ってからだと、威勢よく出たものの、さてそのあとは四苦八苦とならない用心だけは忘れないように。

いたずらへ一矢むくいて貝となり

瀬田美和

これはホンの一寸したいたずらであったのだが、それを本気になって怒り、そしてそれ以後はものを言わなくなったというのであるが、この句の佳さは貝となりという結びの語にあると思った。





松江市　大峠可動

しあわせな歩調に出逢う試歩の杖
くちづけのそれから先きをほのめかし
試歩うらら明日の余白へ歩み寄る
振り返る道にひとりの父も老い
日も風もビルの谷間でとぎれたり

姫路市　前田芙巳代

貨車通過かほどに重き愛を見る
人を恋う夜の長さが陽を犯す
ハイウエイまことの恋がして見たく
痛恨の隅でふるさと抱いている
鎖の長さで決る停止線

倉敷市　小野克枝

激しさをどこへ置こうか二十四時
妻の目に含むことあり我慢する
横顔で足りる純情持っている
本心を聞くまで酔うたふりをする

菊沢小松園選

猫の手も犬の手もないから慌て

大阪市　小谷葉子

京恋うて日記を満たす回顧の詩
人知れずもみじ一葉炎えつづけ
若鮎のリズムせせらぎとまどうて
原始村心の奥をのぞかれり

四天王寺壁画

老骨が燃え得て心のすすむまま

米子市　八木千代

夫婦歴互いの弱身疵い合い
錆びついた恋に重たいコンパクト
農になり切った五体が春を待つ
仏壇に老いは拗ねて見甘えて見

守口市　岸本豊平次

歩き出した頃から隣りと比べられ
ふところのぬくみを知らぬ哺乳瓶
ラッシュアワー車掌の靴は光ってた

住み込みの枕か涙を聞いてくれ
大阪市　黒田真砂

会えぬ日のコーヒはにがく泌み渡り
M寸が合わぬ子供に悲鳴あげ
セットして主婦の満足感あわれ
人を待つジュースの甘くほろ苦し
神戸市　来住タカ子

泣き出すを待つ瞳がキラリ光ってる
邪魔にされ邪魔になってついてゆく
弱点を見せて女は強くなり
花の流れにあの人をつき放つ
岡山県　山田止水

試供薬効き目の判る程呉れず
かずの子は食べず嫌いの子に育ち
腹の立つ妻と一緒に乗り遅れ
よろめいて居てガス洩れに気が付がず
尼崎市　中谷利美

働いた金では建たぬ家に住み
法善寺むかし別れた妓に出会い
紅一点大の男をてこずらせ
とび乗りへ駅長片手貸してやり
岐阜県　市川鱗魚

毛虫にも蝶になる日を許るされる
そむかれていても母だけ味方する
偽善者のタクトは踊り易き唄
米子市　林瑞枝

お茶の間の母ゲバ棒の子をみつけ
男性のおしゃべりマイカー中にして
娘の恋を許す母にも同じ過去
竹原市　三宅不朽

悲しみに沈んでいても腹が減り
林檎むく音も初七日さびしかり
まじまじと猫に見られし日のひとり
島根県　小砂白汀

そよ風を巻きとるように風車
ささやかな朱なれどしみる山いちご
歯に衣きせて非力の垣とする
竹原市　森井菁居

手不足へ田植をせかす雨となり
地価跳ねて先祖へ済まぬ気をおこす
流されてやろう勝気な水すまし
出雲市　王紫

一坪の庭蔓バラは又剪られ
人生のルール期限のない債券
困らせておいてよく寝る三才児
大阪市　和田痴亭

石蹴れば石生きていた音を発し
ライター発火一直線にラブ実のる
灰皿へ話のつぎほ押しつぶし
土佐市　海地大破

足摺行（二）

燈台の白亜くっきり炎えあがる
落日の岬こころのあく落とす
雨粗く傘さしかけて夜の岬

八幡浜市　別宮すき

ネクタイの数に背広のおいつかず
ベストテンの税金はらう門構え
金魚鉢どこへおいても猫が泣き

島根県　堀江正朗

左眼球摘出手術して
決心を迫る疼きが身を刻む
ベッドの苦行悟り開くに程遠く
顔を拭く素振りで涙かき消して

島根県　堀江芳子

握手してここから行けぬ手術室
眼帯よおまえも眼球恋しかろ
やがて落つ椿の赤さ憐れとも

和歌山市　増田めぐみ

空に舞う鳥にも明日の生きる道
新しき命のために花は散る
化粧して何んの苦もない顔になり

東大阪市　落合思月

セールスのねばりに気弱い母が折れ
同病で気安くなった待合所
かたくなにハイミス砦にとじこもり
税務署と会うにも女コンパクト
三日目はもう珍客でもてなさず
裏路へ来てチンドン屋汗を拭き

八代市　船木史朗

夫婦の対話そう言えば忘れてた
真夜中に覚めてつくづく一人なり
戦争を知らぬ世代のデモが派手

今治市　渡辺南奉

信心が足らぬからだと病み続け
大ジョッキ女やっぱりてれている
一番に唄う男が今日休み

京都府　福村飛龍

男だけ肩を濡らした雨やどり
摘まれる身知らぬ雑草花をつけ
隣から貰った花が先に咲き

河内長野市　小川耕人

流行に負けてズボンを細くはき
満月のヴェール剝がれたとも見えず
義理のある顔を素通りさす財布

羽曳野市　榎本吐来

電子レンジ愛情うすいもの食わせ
ニコヨンのぞろぞろ帰る日の高さ
魚心水心終電に乗りおくれ

下関市　志賀木石

下関市　志賀汀花

骨になる迄を茶菓子で待たされる
火葬場の跡方もなく家が建ち
遍路衣をぬいで温泉の客になり

鳥取県　川崎秋女

母さんの希いをよそにデモ続く
胎動のはげしき夜なり縫い急ぐ
未練などないと自分に言いきかせ

七尾市　松高秀峰

子の非行大人の嘘が重ねられ
父の日も夜勤のペタル踏んでゆく
手ぶらでも寄って見ようか父の日に

羽曳野市　前川桂馬

恋人の前は無口なバスガイド
家計簿が二重帳簿とは知らず
婆ぬきにいざこざもなき雀の巣

河内長野市　森本黒天子

今日になって菊厄介な手がかかり
鳥居くぐって善男善女になりすまし
桃色のあそびにほうけたなれのはて

今治市　古野伶人

奥さんの余り貰うて髪を染め
成熟をした体臭にすり寄られ
前納に限り税金負けて呉れ

藤井寺市　古結百水

月謝分だけのお料理娘は作り
花氷痩せ細りたり客まばら
涼しさを氷コップに音を立て

鳥取県　鈴木村諷子

知恵がないから比較論でゆき
反省会という名目で酒が出る
血圧を言ってきれいに活きている

島根県　志賀美栄

風化せし愛の形見よネックレス
兎に角に曲りなりにも家が建ち
ハンドルを握る我が子に身を任せ

新潟県　高野不二

ただならと云う講演へ来て眠り
戦争を知らないストをガスで攻め
米の値を汗を知らない人がきめ

島根県　栂みどり

限りなく美を追う女われもまた
娘のゆかたすくう針にも母心
子の墓碑へ傘さしかける雨つづき

米子市　増田竹馬

コマーシャルしばし老眼小休止
小児科医いい子いい子と注射針
日曜の雨保険屋に押し切られ

羽曳野市　麻野幽玄

同じ餌ばかりを金魚飽きもせず
池の静まりへ孤独が石を投げさせる

病むは肌窓の冷気を締めさせる

竹原市　時広一路

別の顔持てぬ自分と諦める
ふっきれぬ思いへ窓を明けてみる
今日の空天気予報の雲見えず

広島県　南条露声

かたくなりそうなのでよそへもあげ
たかが指輪一個に男誘うて出
極楽が妻ソワソワの敷き布団

大洲市　堀内暁風

古本に朱線の苦労なつかしむ
魔のカーブ誰れが建てたか地蔵さん
役得の上へ水増す領収書

寝屋川市　福富隆子

先生の汚職の額は微々なれど
やせない肥る材料ばかり好き
診せとうないところで極限まで痛み

大阪市　堀口欣一

小五郎と幾松眠る東山
紫陽花が今年は遅い一周忌
妻の帯これも誰かのかたみ分け

京都市　藤本征山

功成った顔で月賦の家を建て
読んだ後焼けとは惜しい章があり
石庭をわかったような顔で坐し

出雲市　竹内李朋

独走の美なりき源氏物語
定年もライフワークと云う余力
病棟も浮足立っている連休

出雲市　土江久美

ああこの声電話の中の母の声
発展する社会横目で見て療養
使ってないつもりの財布何時か空ら

貝塚市　行天千代

主人死亡す
いびきかく人亡くなって夜の静か
冥土から加勢が欲しい申告期

大阪市　江城功雄

共稼ぎ家計に生きる夫婦愛
地下街に何を買う気か人の群れ

大阪市　藤田頂留子

花すなおここが大地と鉢で咲く
熱っぽくビラボーナスをねらってた

大阪市　有信新之助

ひかり号乗ってみる顔飽きた顔
有り余る故にどこやら淋しそう

岡山県　浜口志賀夫

スモッグを呑んで吐き出す鯉のぼり
バードデーせめて碧空見せてやり

鳥取市　近藤秋星

黙々と雨降る中を植えつづけ
嫁きもせず今年も田植へ刈り出され
高知県　山川勝子

嫁が来て笑いが絶えぬ台所
軒下をつばめに貸して掃除ふえ
鳥取市　有田鹿の子

せめてもの慰め桜を生けて見せ
夏やせを防ぐ料理も念が入り
泉佐野市　大工静子

束の間に鬼になり合う仲間割れ
バス旅行薬のんでは寝る車
大阪市　田中多幸

酒ビンと思うて見ても薬ビン
口説かれも口説もせずに通じ合い
大阪市　島野大吉

雨蛙鳴いて弁当を思案さす
反省を笑うネオンが誘い出す
河内長野市　井上喜酔

天皇賞テレビの方が楽に見え
あこがれの都会で捨てた純情さ
今治市　原田輝親

さあ何か言うぞ眼鏡の瞳が光り
深夜の南海電車で
奥さんに任せ切ってる帰り道
八尾市　香川酔々

レールだけ残して市電役目済み
社長室ノックの音で笑顔消し
諫早市　原田明春

胎動へ夫婦それぞれの夢をもち
寡婦として職場に生きる薄化粧
島根県　中島英子

鎧戸の残る我が家は雨がもり
過疎の里犬もとまどり庭の草
岡山県　片山雅子

十三夜の月を頼りに麦を刈り
生理日と田植はからずめぐり会い
八尾市　高杉千歩

平和とはいまですさし木に夢のせる
顔を見た安堵叱らず肩をだき
和歌山市　増田次章

牛乳びんのきしみ今日がはじまる
相性の小さな活字に動かされ
西宮市　加納聖司

俺だけか駅弁ひらくグリーン車
俺の顔見上げて仔犬用を足す
出雲市　板垣草丘

貰い物欲と二人で軽く持ち
子の声がうわずりたまに買うおもちゃ
竹原市　生信笑子

追いかける波よ素足になりなさい

ちっぽけな抵抗口紅を強く引き
奈良市　桑原千里

古池を残して宅地山を埋めストの犠牲お人好しには通じない
鳥取県　大山果風

恩給はいいなと思う老夫婦果樹園もカメラにとればよい眺め
泉佐野市　大工チヨ

叩いたり叩かれたりして老の肩初夏の風ミニスカートも板につき
堺市斎藤亜也

個人タクシーで安心してる居眠り行列して入つた図書館で昼寝をし
羽咋市　三宅ろ亭

ご苦労に越境までして胡瓜なり失意の月疎外の言葉かみしめる
和歌山市　林孝風

国鉄マンズボンの折り目も複線化ハネムーン期待と不安が入りまじり
宿毛市　瀬田美知

尋ね人ここにも蒸発した母かサボテンへ子猫は二度と近づかず
神戸市　横山孜孝

言訳を考えて居る伝言板二日酔休暇は妻が電話する
大田市　藤田軒太楼

腹八分目胃痛の時はそう思い見えすいた仕草と知ってて負けておき
羽曳野市　飯田一治

事故表に海も陸には負けていず病気した便りが最後でそれっきり
鳥取市　稲村光枝

口惜しさを隠し勉強になりました恩給に漕ぎつけ自律神経失調症
大阪市　西本保夫

支度金やるともう来ぬ臨時工求人の旅へノルマも割り当てる
鳥取県　山本文子

太陽のにおう布団に手足のべ陽炎をたてて鉄筋ビル満を持す
大阪市　河原林比呂路

文鎮を形見に残し去る市電ママ事も女上位の母を真似
和歌山市　吉野富江

生むは安し教育難しと親知らず転宅にゴキブリまでもついて来る
和歌山県　加藤とらじ

遮断機も用のないときそっぽ向き煽てても言うこと聞かぬ吾子となり
大阪市　岡本まさひろ

蔓でさえやはり右巻き左巻き
鮓詰めを追い抜いてゆく特急の空ら
鳥取県　両　川　洋　々

トンビから生まれたタカが今日嫁ぎ
縫い上げて羽織って妻のものでなし
岡山市　谷　森　和　風

十回目まだ公団へ夢をかけ
交番の前でスピードちょっ下げ
高槻市　山　田　スミ子

子のプラン夜の二時に起こされる
ため息をつくひまが有りホットする
和歌山県　ふきあげ　虎　城

夜の飢えホステスしゃべりたきグラス
寝れない頭の芯のスクリーン
大阪市　大　西　為　二

理解ある親父に事故の後始末
俺なれば大事にするとひとり者
大阪市　斎　藤　三十四

話好きホラ吹く人と親しまれ
通勤の向いのミニへ目が困り
大阪市　松　岡　茶々坊

金持に金がはいればケチになり
家だけは買ったが庭の木は買えず
大阪市　花　田　繁　子

後れても行きつくとこは同じとこ
ニセ時代割箸だけは木の香り
大阪市　松　岡　進

夏時間恋の二人にあかるすぎ
スモッグに古木が今日も枯れて行く
出雲市　飯　塚　全喜知

しとやかに帰る刃れと降りそそぐ
梅の花活けて思案の枝落し
鳥取県　栗　垣　信　雄

連休へ素人ガイドの日御碕
エンプラにすこうし狭い日本海
出雲市　安　井　寿　年

鍬先をどうやら蛙無事に跳び
煙草一本くすねて二男出勤す
鳥取市　谷　尾　透　風

のり越した駅から夜通し歩く破目
雪国を守った兄の雪だより
鳥取市　藤　本　鎭　也

要るだけはいるんだ出納帳つけず
よく話す母が無口の父に負け
鳥取市　藤　本　恵　子

母の日だせめて背なと洗ろたげよ
母の日のお料理母がつくらされ
鳥取市　藤　本　和　宏

立腹を父は顔色にも出さず
ライバルにつかず離れず努力する

米子市　源　氏　勝　久

それっきり逢わぬ想い出美しい
子沢山だけど養子にやる子なし

兵庫県　不二本和久

子宝が又別室へ追いやられ
お茶席へはちきれそうなミニのひざ

鳥取市　藤本佳女

身から出た錆と胃カメラまでも飲み
逆境に耐える明るい子に育ち

広島市　槙田英詩

嘘みんな捕えられそう純な眼に

尼崎市　平井露芳

千恵子抄成程都会に空がない

愛媛県　嶝本満子

美しく咲いてトゲだけ嫌われる

大阪市　影山啓吉

気まぐれの文通ほんまの恋になり

堺市　藤谷象園

生き甲斐は何処にでもあるビヤホール

倉敷市　竹内翁童

求人難初任給ばかりふえ

岡山県　武元柳子

数々のあて字混えて子に便り

神戸市　開田華羽

天草雲仙所見

キリシタン地蔵と聞きし木下闇

愛媛県　北川清

病歴を語る女患の目は見ない

愛媛県　西田道夫

髪染めても顔は人工でさからえず

広島県　南条露声

富士五湖にて

雲切れた富士助手席に知らされる

和歌山県　加納花秀

解禁の川に割箸流れて来

出雲市　田中泥子

退院のつづくこの頃花曇り

島根県　石倉晃

点々とボスの陣取る鯉のぼり

長野県　中尾愛

春眠暁に君をまどろみる

仙台市　川村映輝

再就職自分でみがく靴にぶし

鳥取県　福山貴恵

仕立もの積み重ねられ湧くファイト

鳥取県　藤泰嗣

うつむいて背筋のほくろのぞかせる

鳥取市　河口忠志

水遊びたらいへ飽きた子へ困り

鳥取市　夏目葉舟

健康な老い退屈をもてあまし
鳥取県　中沢慎利子

真相を見抜く稚ない眼を恐れ
大阪市　木村久子

二才児がゴーゴー踊るのも時代
大阪市　高橋ハヤ

複数に生きる女の宿命か
大阪市　木村独水

大原女の姿につられスグキ買い
大阪市　今井隼人

栄転の後に左遷が座にすわり
大阪市　吉野志津

都会の子あれもこれもと押花に
大阪市　大池聖川

スモッグと騒音に泣く町並木
大阪市　大池芳

父の日に無理せぬようと便りつく

・近詠・

カーブ切るここにも女姿態があり
眠ければすぐ横になる妻となり
この戸開きませんピンポンの音がする
沈黙をついに破った正義感
大洲市　米沢暁明

一人一人の過去を聞きたい養老院
頑として墓は離れず過疎の村
銘柄がおちる屋台で飲む男
和歌山　秋月宏方

衛生車お釣りを貰わぬように出し
ベビーブームに生れ安保に留年す
ここからは舗装が切れている政治
今治市　月原宵明

義理一つ電話で勘忍してもらい
よくしゃべる無知の口元見ていたり
会社などつぶしてしまえ賃上げろ
欲深い音にきこえるお賽銭
小松市　山上千太郎

また会おうなどと会う気のない別れ
非常口程度のバーの出入口
どうやって負けよう孫とジャンケンポ
今治市　長野文庫

すんだこともう云いこなし手を握る
人の世に報われてきた感謝状
シャッターいま笑いなさいパチリ切る
名古屋市　長谷川鮮山

転勤

藤井春日選

転勤の部下に旧知の友がおり　泰嗣
転勤の外地で日本の四季を恋い　佳女
転勤へ先ず転校の子を案じ　勝久
企業への情熱の果て左遷され　耕人
転勤に将棋仲間が一人消え　花秀
転勤へもう押し寄せた御用聞き　礎山
転勤で別れとうない娘が一人　七面山
栄転の夕餉に妻は気をきかせ　双楽
転勤を知らせ故郷の母を呼び　瑞枝
転勤で隣へ一株ずつくばり　露声
転勤は花に最後の水をやり　暁明
転勤をおくる輪の上蝶の舞い　白灯
転勤の子は方言をすぐ覚え　綾女
転勤へ月賦の残りがついて来る　扇水
転勤へニックネームもついてゆき　英子
栄転と左遷が並ぶ床柱　弘朗
栄転は汚職の後を継がされる　初甫
兵一歩と金になって転勤し　百水
転勤のここにもうまい酒があり　洋々
転勤のつてがそのまま紐となり　古方
吹けば飛ぶような辞令の荷をまとめ　利美
転勤がもうツケの効く店を知り　秋月
栄転の転勤先へ逮捕状　輝親
借りは借り呉れる餞別もらっとき　木魚
転勤でやっと当った家を捨て　どんたく
実弾の無理効く頃に転勤し　一二三
ライバルの転勤張り合いなく淋し　勝子
東京へ転勤土まで持って行き　素身郎
転勤はないが十年同じ椅子　弘朗
倦怠の空気をぬけて来た任地　葵水
地下足袋に転勤のない有難さ　一治
転勤に別れ惜しんだ壁の傷　柳子
訳のある女へ転勤会釈する　露声
転勤へ彼女の意思を確かめる　軒太楼
転勤の内示へ左遷地の匂い　千翁
転勤の当座は椅子も浮いている　まさひろ
えろう気を使わしたまま転勤す　古方
転勤のたびに女が出来ている　虎城
そのことに触れず転勤辞令出る　木魚
考えた末を左遷が発って行き　史朗
心から転勤祝う掌がぬくい　征山
東北へ転勤スキーでもしてこませ　七面山
油乗った夫を辞令が別居させ　章雅

佳

転勤が実感となる山を越し　止水
転勤がなければばれていた浮気　素身郎
不始末へ転勤だけでことがすみ　暁風
悄々と左遷の小駅に一人降り　藤波
転勤へ妻は近所へ哭きにゆき　忠志

人

栄転へ妻の位牌を抱いて発ち　無望

地

背負って立つ転勤は胸を張り　いわを

天

臨月を里へ預けて転勤す　里風

橘高薫風著
れもん
送料共
五百円

野心

松岡委滄浪選

野心などないがと言っている野心　秋月
野心家が独り残業していたり　鵜汀
宝くじ買ったぐらいで湧く野心　可住
失言へ野心チョピリのぞいて出　雅子
花輪から次期の野心が窺われ　宵明
野心とは云えない程の夢を抱き　透風
そろばんに合いそう野心育ちだし　征山
老後には老後の野心孫へかけ　勝久
野心もう見抜きマダムが酌に来る　泰嗣
ド心あって映画へ先ず誘い　葉舟
嫁にする親の野心へ背を向ける　春日
子が一人できて野心がもう揺らぎ　洋々
孫抱いて何んの野心もない姿　暁風
手を触れる事は次回のデートにし　とらじ
定年が野心に遠慮なく迫り　素身郎
野心家というには肉がついとらず　新之助
ひとり来た野心マダムに見破られ　利夫

吟題課

別れゆく上司へ野心が北叟笑み　道雄
酒の席上座へ罷り出る野心　英詩
野心継ぐ子一人無い子沢山　政夫
孫のもつ小さな野心肩たたく　白汀
野心家の目が忙しく動く酒　芳仙
善人の野心は高が知れている　輝親
脇道へ野心がそれた汚職の座　止水
いじらしい夢だ野心と言う勿れ　百水
屈辱に耐えて野心を温める　光枝
下積の野心根強く持続け　軒太楼
打ちとけた顔で野心の身づくろい　千翁
第二の人生などと野心のまだ消ゑ　どんたく
うすうすは専務の野心知る社長　映月
野心ない性格良識派と言われ　千里
野心見えすいた世辞聞く空虚さよ　綾女
一票へつながる野心花輪来る　南奉
再出馬する気代理でない祝辞　史朗

五客

野心家と言われやりてとも言われ　柳子
野心だんだん小さくなって子が育ち　不二
みみっちい野心を母に笑われる　七面山
のし紙の底へ野心を包み込み　露声
一つ一つ野心が消えて丸うなり　弘朗

人

野心と理想いとややこしうなってく　古方

地

野心家と言われ孤独をかみしめる　双楽

天

鍵かけて小さな野心温める　里風

軸

野心いま造反有理の渦の中

折り目

上田翠光選

金のいらぬ事には折り目正しくし　不二
切れそうな宿の浴衣の固い糊　芳仙
モーニングたたんだ折り目つけたまま　鶏汀
たたずまい堕ち折り目のまだとれず　柳子
熨斗紙の二度の役目をした折り目　藤波
仙台平ただす折り目をぽんと打ち　宵明
後添いが折り目正しい家にする　勝子
児に貸した扇子折り目から破り　佳女
折り目から破れ初めた祖母ゆずり　綾女
ふるさとを追われるように転勤し　泥子
鶴になる折り目二ツ三ツつけて逝き　礎山
妻の郷折り目正しく迎えられ　和久
子が出来てたちまち折り目ないズボン　露声
いつからかズボンの折り自気にする子　思月
すがすがしし折り目で夏を着て歩く　可住
肝心のところが折り目から破れ　百酒
厳格なわりに折り目のない親父　花秀
怒らない父も折り目はやかましい　暁風
折り目正しい言葉の中にこもる愛　七面山
花婿今日折り目正しく困って居　百水
借金の折り目をつけて又借る気　止水
折り目正しく借金断られ　どんたく
折り目正しい人とのデート物足らず　素身郎
折り目ある育ちチャンスを又逃がし　光枝
きっちりと折り目をつけて眠れない　扇水
ぎこちない折り目をつけて嘘がない　千翁
友情の折り目揃うた千羽鶴　里風
席はずすにも後輩と云う意識　葵水
栄転の辞令折り目のつかぬまま　鶴丸
うなされた夜の寝押しが履けもせず　秋月
また汚職しばらく折り目正すだけ　秋月
渡り鳥季節へ折り目持って来る　白汀

佳

薬包紙まだ見習と云う折り目　木魚
もう二度と喪服の折り目伸ばすまじ　南奉
まわし物折り目通りに包んどき　百酒
折り目から冷たい風が吹きぬける　葵水
折り目から少し戻して読み続け　千里

人

折り目から種が見えてるのに力み　可住
停年のズボン折り目が消えている　弘朗
セールスに生きぴしっとひだをつけ　鱗魚

地

片っぱしから折り目こわしてデモクラシー　古方
人生の折り目きれいに職をひく　暁明

天

義理一つかかさぬ母の小風呂敷　鱗魚

若本多久志著

「親ごころ・子心」
実費二〇〇円　送料六五円

「老いの坂」
実費四五〇円　送料七〇円

初歩教室

―題「木」―

本田恵二朗

あなたの句境を、あなたの訛りで、十七音字という小皿に、懸命に盛り上げようとしたが、表も裏も、みんな盛り上げようと欲張ったばかりに、あそこがこぼれ、ここがこわれして、カッコの悪いものになっちゃった。

そこで、あなたの句境を、私の訛りで、盛り直して見た。つまり、あなたの訛りと、私の訛りとのコンクールである。あなたも私も共に、恥をかき合うことでもあろうが、これも勉強だと思うことにしようではないか。敢て名前を伏せないことにするが、その方が堂々としているし、川柳人の襟度でもあろう。

鳥が好む実がなる木を庭へ植え　弘生
（鳥が好く実のなる一本庭に植え）

植木市ただ見るだけの歩をはこぶ　冨子
（見るだけの歩巾楽しむ植木市）

奥山の木こりの唄は鋸をひく　生仏
（木こり唄鋸に伴奏させている）

ゲバ棒をそっと道端に捨てて行き　茂美
（ゲバ棒を捨てた道端すみれ笑む）

木こりさん末の夢見を楽しみに　ひさ絵
（木こりする胸に未来の夢秘める）

植木市買わぬお客がPR　為二
（植木市買わぬお客がサクラめく）

柿の木の蔭で蚕の食い盛り　全喜知
（蚕さん柿の木蔭で食い盛り）

大木に〆縄新た手を合わせ　久子
（〆縄の鉢巻年輪拝まれる）

流れ木へ子らつかまって夏の川　晃
（カッパどもつかまれとゆっくり流れる木）

こけしさん二人仲良く木切れから　志津
（運の良い木切れこけしになって生き）

ひねくれた松の根性はほめられる　比呂路
（ひねくれるだけひねくれて松誇る）

成金は庭木一本にも金をかけ　綾女
（庭木一本成金の匂いする）

盆栽の松ふるさとを恋しがり　和風
（盆栽の松よふるさと恋しかろ）

木も老いた私も老いて年数え　茶々坊
（木も老いた私も老いた長い道）

一本の杭地価値上りを待って立ち　一二三
（地価上れ上れと杭の独り言）

木婚式そろそろ化粧しなくなり　虎城
（木婚式そろそろ鏡忘れかけ）

木に充つる緑の血気羨まし　古平
（羨ましい血気にもえる若緑）

名月は老木添えて池に浮き　英詩
（月まるく老樹を連れて池に浮く）

楠の下枝から透いて見える空の青　静観堂
（楠の枝洩る空の青といる）

叩いたら金属の音がする木目　新之助
（木目キーンと金属音を誇るなり）

記念樹に思い出深い花が咲き　軒太楼
（記念樹の花にあの頃なつかしむ）

積木する子ら目に見えて知恵がつき　同
（積木する子らすくすくと知恵深む）

年輪の相違雷の落ちたあと　進
（雷公の爪年輪をむしり取り）

さつきの葉より大きな毛虫宿り　静子
（毛虫に宿かして木の葉くたぶれる）

結構な普請柱をほめておき　肖二
（新築の柱ほめほめ妬いて見せ）

マイホーム植木も予算の中に入れ　三十四
（新築の予算に植木二三本）

木の葉の如く財布の中味消え　花秀
（古財布木の葉のように中味散る）

柳箋

一冊　六十五円
送料　三十五円

青春の夢は大木の枝のよう　啓吉
（若者の夢が大樹のように伸び）

にせ時代割箸だけは木の香り　繁子
（科学製品時代に割箸生き残り）

木を植えて何百年か日光宮　一休
（日光の歴史を語る松並木）
森林のこやしは父の汗あぶら　泥子
（父の汗吸うてすくすく杉林）
年金ぐらし散歩に通うた並木道　多幸
（並木道年金ぐらしの歩が軽い）
汐風に耐えて小島のひね小松　孜孝
（汐風がひねりつぶした島の松）
闘病の独りの窓へ木の葉散る　瑞枝
（闘病の孤愁木の葉が来て叩く）
枕木も退職すれば柵に化け　とらじ
（枕木の定年退職柵に化け）
木遣節うつろにひびく旅衣　徹也
（木遣節うつろに響く旅愁抱く）
桜木の花にぼんぼり人を呼ぶ　セツ
（ぼんぼりで着飾り桜媚びている）
木を組んだ筏流しのうまいかじ　芳
（筏師の棹白波にさからわず）
桧笠しぶきを浴びて川下る　聖川
（桧笠ガイドの唄へ波踊る）
真影流初段なかなか薪割れず　大吉
（薪割りへ真影流があなどられ）
木も老えば木蔭となりて涼しけれ　キサノ
（老木の分けへだてなく涼をくれ）
大木の強さ公害にもめげず　保夫
（大木の貫録公害よせつけず）
植木屋の鋏で松もよみがえり　隼人
（植木屋のチョキチョキ松を若うする）
北国の清楚な林白樺の木　ハヤ
（白樺の肌の清楚と対話する）
渡来した木芽田楽酒買わし　濁水
（木の芽田楽届いて一本つけさせる）
鉄骨の谷間に見える木の香り　ムラエ
（鉄骨の谷に耐えてる木のあわれ）
蹟いた木の根叩いて子を宥め　光枝
（子を蹟かせた株をママ蹴ってやり）
せくらべをせし木も今は老木に　秀村
（せくらべをしたなあ老木なでてやり）
杉木立眼下にバスの七曲り　利美
（七曲り杉の木立をバスが縫い）
以下は原句のままである。
月平線のぼる地球に木が青い　正直
鉋屑燃やして今日へピリオット　史朗
木枕を孫に見せての物語り　富士
てっぺんの松台風をうけて立ち　すき
愛妻といえど任かせぬ植木鉢　慶彦
百本の年輪誇る木の香り　露声
ええ葬式やと樒の数をほめ　誓二
神木へ大吉しかと結ばれる　洋々
宿り木の若葉太平楽に伸び　止水
おみくじが古木に花を咲かせてる　雅万
駅弁の木の香も楽し独り旅　李朋
枕木の下から不運なこぼれ種　美代
落選が木で鼻くくった口をきき　政夫
よき句材の発見と、たくみな表現と、その両々相まって、佳句が生まれる。それはなかなかむつかしい。だが楽しい。だからがん張ろう。

※
題「酒」　八月二十日締切（十月号発表）
題「祈」　九月二十日締切（十一月号発表）
宛先（〒711）倉敷市下津井三五二
本田恵二朗

・常任理事会・

七月四日六時から例によって本社の常任理事会が開かれた。

一番乗りは傍島静馬氏でしんがりは菊沢小松園氏。小松園氏は〝閉会の辞〟というニックネームどおり、ご自分の時間は有効に使うことで定評がある。

別掲のとおり賛助会員は予想をグンとオーバーした。

「頭が下がるね」とは、理事長以下いつわりのない感謝のことばだった。だからこれにこたえるだけの熱意を当然なんらかの形で表明しなくてはならないだろう。（F）

明年の路郎忌会は七月五日に決定。
出席―静馬・好郎・古方・多久志・白柳・文秋・生々庵・形水・小松園・一三夫諸氏。

第二百十七回（四十四年度第七回）

大萬川柳

「横　顔」

入選発表

選者　清水白柳
投句総数　七百三十句
入　選　八十一　句

堺　草　春
かくしたい喜び横顔から溢れ
八尾　鬼　遊
横顔の固さへ紅茶をそっと置き
貝塚　つき子
たよりない横顔かけがえのない夫
今治　宵　明
横顔だけ見せて相手にしてくれず
堺　一二三
頑くなに横顔見せて黙否権
富田林　きはち
いい噂聞く横顔の無表情
東大阪　綾　女
横顔をにらみうっ憤押えてる
藤井寺　吸　江
横顔は男に疲れた匂いする
大阪　滋　雀
鶏の不満は横顔ばかりの絵
大阪　あいき
気に入らぬ横顔三面鏡が写す
八尾　千　歩
横顔をうつして終る娘の化粧

岡山　一　声
借りのある横顔気づかれぬように逃げ
鳥取　秋　女
週刊誌で知った社長のプロフィール
堺　千万子
二日酔わかる社長のプロフィール
米子　千　代
禁酒した父の横顔気にかかり
島根　正　朗
横顔が好きで集めたブロマイド
篠山　可　住
口答えする横顔に髭が見え
大阪　形　水
横顔に打算の色があからさま
大田　軒太楼
盗まれていると横顔意識する
守口　笑　風
横顔は左を意識する女
大阪　小　路
横顔の汗鼻先にくるラッシュ
米子　瑞　枝
神妙な横顔ついに出るあくび

大阪　庸　佑
似てる似てるまた横顔を向かされる
岡山　久米雄
観念をしたと横顔見てとられ
西宮　百　酒
聞きあきた話横顔へまだ喋り
大阪　阿　茶
横顔を見せよい位置へ腰をかけ
倉敷　里　風
露路抜けるその横顔に貸しがあり
大阪　進
横顔をしみじみと見るふけた妻
大阪　雅　万
横顔が想い出させた過去の人
大阪　一　休
バス停で横顔見てる内気者
和歌山　花　秀
横顔がそっくり血筋あらそえず
大阪　弘　生
横顔ですねているのは脈があり
倉敷　扇　水
犯人も人の子横顔だけ写し
大阪　久　情
なに喰わぬ横顔今日の恋終る
大阪　文　秋
追求の目に耐えきれず横を向き
尼崎　利　美
横顔でピッタリ当てたシルエット
岐阜　鱗　魚
ふっと横向いて心は偽われず
大阪　旅　風

横むいた娘にふっと母の顔
鳥取　佳　女
横顔に男らしさを意識する
鳥取　恵　子
宮さまの横顔だけは見て帰り
鳥取　透　風
横顔もうしろも撮られ晴れ姿
鳥取　洋　々
大臣のプロフィール茶もたて花も活け
高石　好　郎
すねている横顔男は弱いもの
折れてくる夫を横顔待っており
大阪　薫　風
恋の深傷が横顔に出る
横顔をしばらく見せる叱られて
倉敷　三林坊
異母姉妹横顔だけが生き写し
横顔の瞳がぬれている喪服
堺　天　笑
横顔のほてり具合も脈があり
褒められた横顔トイレでたしかめる
羽曳野　幽　玄
横顔に面影残っている出合い
横顔を影にテレビのラブシーン
大阪　水　客
洗面所横顔同士話し合い
横顔は故郷の音を聞いている
大阪　慶之助
横顔に走った不安を見のがさず
横顔がそっくりやわと酌いでくれ
和歌山　冨　子

横顔が子に似たテレビのヘルメット
耳打ちをされ横顔のうれしそう
藤井寺　百　水
ツンとした横顔今はもう他人
向き合えば負けそな眸へ横を向き
富田林　花　梢
横顔は貴方まかせの返事なり
横顔はどこか抜けてる待ちぼうけ
大　阪　比呂路
横顔に妥協する気を見せはじめ
横顔に見とれて石にけつまずき
鳥　取　鎮　也
せめてものお世辞横顔ほめておき
横顔をほめれば横を向いてすね
大　阪　小松園
張り倒してやりたい横顔そこにあり
それとなくその横顔へ詫びて発ち
泣いていたらしい病人横を向き
大　阪　柳　志
羨望の瞳が横顔へ突きささり
横顔を見せて小言を云う弱気
横顔を見てスターのサインペン
付けまつげ見せる角度へ横を向き
佳　句
高　石　好　郎
横顔も一度直し鏡閉ず
今　治　宵　明
横顔の憂い一点凝視する
富田林　花　梢
人妻となる横顔を遠く見る
大　阪　文　秋
子供の絵象もキリンも横を向き
鳥　取　葉　舟
横顔を見つめる恋に気がつかず
人ノ句　鳥　取　鎮　也
受験するライバル横顔まで冴える
地ノ句　和歌山　葵　水
打明ける目が横顔をたしなめる
天ノ句　倉　敷　十四雄
回想の横顔煙草消えている
選者吟
窓の陽へ生ぶ毛を見てタイピスト

大萬川柳四十四年度　第七回
ベストテン（七月現在）

一	瑞　枝	一五、〇	米　子
二	柳　志	一五、〇	大　阪
三	文　秋	一三、五	大　阪
四	天　笑	一三、五	堺
五	小　路	一二、五	大　阪
六	千代子	一二、〇	米　子
七	水　客	一一、五	大　阪
八	克　枝	一一、〇	倉　敷
九	鱗　魚	一〇、五	岐　阜
十	花　梢	一〇、五	富田林
十一	里　風	九、〇	倉　敷
十二	小松園	九、〇	大　阪
十三	葵　水	八、五	和歌山
十四	好　郎	八、五	高　石
十五	慶之助	八、五	大　阪
十六	弘　生	八、〇	大　阪
十七	阿茶子	八、〇	大　阪
十八	吸　江	八、〇	藤井寺
十九	秋　月	八、〇	岡　山
二〇	鎮　也	六、五	鳥　取
二一	暁　明	六、五	大　洲
二二	素身郎	六、五	倉　敷
二三	美　房	六、五	大　阪
二四	十四雄	六、〇	倉　敷
二五	虎　城	六、〇	和歌山
二六	青　香	六、〇	堺
二七	薫　風	六、〇	大　阪
二八	雀躍子	六、〇	桜　井
二九	笑　風	五、五	守　口
三〇	史　好	五、五	大　阪

以下略

昭和四十四年度第九回
「鮒」　五句以内
締切　八月二十日
第十回
「姿（すがた）」　五句以内
締切　九月二十日
投句先
大阪府高石市高師浜三丁目五―六
郵便番号　五九二
川村好郎

★
▼大萬あれこれ―ベスト10に女流作家が四名も登場するのは今回がはじめてであろう。（F）

秋田実主宰・不二田一三夫編集
月刊「漫才」　定価　百円　送料　六円
発行所　大阪市生野区勝山通6ノ79
電話　大阪（718）3218

柳界展望

あちらからこちらから
お便りを待っています。
（橘高薫風・担当）

▼麻生葭乃先生から「レントゲンの結果、どうにか危機はのがれたようですが年寄りの病気は永びきます。時々万代のお仏壇へお経をあげにゆきます。路郎忌にご出席の方々にお礼申しあげます。先生の住居番号が変更になった。奈良県生駒郡生駒町本町八番五号。

▼榎田竹林・榎田柳葉女金婚記念祝賀川柳大会は九月二十八日（日）午前十時から静岡駅前日興会館六階光琳閣大ホールで開催。兼題・傘・余聞・金文字・城下町・愛・表札・不退転・結ぶ・糸・のらりくらり、（投句は受付けない）

▼インターナショナル誌上川柳大会は川柳噴煙吟社（熊本市）の創立二十周年を記念して開催される。兼題母・森脇幽香里選、強気・佐藤残香選、眼・安村玉泉選、笑・安藤魔門選、平和・堀田栄光花選、家・崎村白津選、夕陽・森田玉兎選、ふるさと・上野鈍突選、切手・前山北海道、歴史・富士野鞍馬選、息子・近江砂人選、予想・中島生々庵選、箸・堀口塊人選、英雄・椙元紋太選、世界・大嶋濤明選、各題二句、投句は三百円同封の上、十二月十日までに熊本市出水町国府二〇八八川柳噴煙吟社誌上大会係宛。

▼長崎川柳社創立二十周年記念第十一回西日本川柳大会は十一月九日正午から雲仙有鱗荘で開催。兼題、放牧・月曜日・はたち・領土・民話・炬火・巣箱・雛島、投句は二百円封入の上十月三十日までに長崎市平戸小屋町二鳥巣幸柳宛。

▼川柳はこだて誌六月号は花童子賞入選発表特集号として六月一日発行。第十一回花童子賞は東京の木村隆氏が第一席を獲得され。「一歩踏み出す決断に妻子居る」「雑草も花を咲かすと蜂がくる」など五句の作品がその対称。第二席は水俣の畑多聞子、第三席は函館の本間紫虹の両氏がそれぞれ受賞された。

▼時の川柳誌六月号は百五十号として発行されたが、それを記念して物故者の霊を慰め、創刊からの多年の購読者の記念品を送ることなどで自祝される。主幹の三條東洋樹氏はふあうすと同人を退かれた。

▼あすなろ川柳会雄琴温泉吟行は六月十四日、十五日の両日、それぞれ寄せ書きを頂戴した。——雄琴温泉男ばかりの夜が更け　好郎

▼せんば六月句会は二十一日（土）午後六時から藤井玄武洞三周忌追悼句会として開催、本社から清水白柳氏と薫風が出席故人を偲んだ。

▼第十二回近県川柳大会（竹原市）は九月七日（日）午前九時から竹原市民館で開催。兼題、箸・マッチ・窓・盃・知恵・鍵・短気・海・血、（各題二句）、投句は百五十円封入の上、幅四㌢、長さ二十一㌢の句箋に住所氏名並記して、広島県竹原市竹原田中山内静水宛。

▼第十八回東北川柳大会は十月十二日（日）午前十時から仙台市仙台信用金庫七階ホールで開催。兼題、どよめき・指定席・レッテル・打診・匿名・呼ぶ・後の祭り・ゆっくり・本心、（各題二句）投句は百五十円同封の上、十月五日までに仙台市東八番丁一七〇後藤閑人方東北川柳大会事務局宛。

▼かがみ川柳社（岡山県）主催の八月吟行は二日午前十時から苫田郡上才原村白雲閣へ。兼題、白・雲・涼しい・宝石・紛争。

▼中島生々庵主幹は路郎忌句会終了後、来会の石原青竜刀、東野大八、三井酔夢の諸氏を招待、一三夫・薫風の編集スタッフを交じえ歓談された。

▼若本多久志氏（西宮副理事長）は七月一日ライオンズクラブ世界大会出席のため上京、また尾崎工業会六月例会で、「経営と川柳」と題して講演をされた。

▼本田恵二朗氏（倉敷市参事）から、めぐり来た路郎忌に参上出来ぬのは残念だが、数々の思い出を噛みしめながら師の冥福を祈りますと寄信「スランプをかき消す名医でもあった」

▼上田翠光氏（奈良同人）から、「カムバックする気〈折り目〉の選をする」と折り目をつけてカムバックする心境を寄せられた。

▼村上春巳氏（奈良同人）は大和タイムス紙上の「ニュース川柳」欄の選者（七月）を担当される。

▼西尾栞氏（八尾市理事）は六月十九日新幹線を三島で下り、江川邸、反射炉を

美しい心
美しい花
富田林　公栄社　(07212)2064

見学、土肥温泉で一泊、清水港から日本平や久能山を巡遊帰阪された。「乗って来た汽船が出てゆく宿の窓」

▼清水白柳氏（大阪理事）は小松で墓参をすませ能登和倉まで足をのばされたが川柳を離れてと思ってもつい、「父の日を能登の旅路は丘ばかり」

▼岡村久志良氏（岡山県同人）から、アメリカバラ吟社斎藤竜子さん歓迎の夕食会がホテルニューオカヤマで持たれたと寄せ書きを頂戴した。恵二朗・万古・あや子の本社同人諸氏の名も見える。

▼長野文庫氏（今治同人）は愛媛川柳史を編集しようと資料を集めておられる。大方の協力をお願いします。

▼若本儀一氏（ハワイ）はオアフ市民研究クラブから「今年のシニア・シチズン」に選ばれ、六月九日和発チャブスイでの表彰昼食会で記念品を授与された。

▼渡辺暁童氏（愛媛同人）は五月一日令息の結婚式を挙行、引続いて家屋新築と多忙の連続だが、仕事の方は昨年九月末退職後、吉海町教育委員会非常勤嘱託で公民館主事をしておられる

▼津花六花氏（宇部同人）は今年一月から県下の盲人に川柳を点字に点訳して、味い方作り方の解説をしておられるが、点字タイプでの点訳技術も一人前になれた由。

新同人紹介

小林由多香
—日満・茗人推薦

林瑞枝
—日満・茗人推薦

八木千代
—日満・茗人推薦

▼小西無鬼氏（兵庫参事）から、「何しろ老妻と二人で二つの店を経営、五時間程の睡眠で三百六十五日を過ごす忙しさで、店番を傭わぬ限り外出不能でどちらへもご無沙汰をしている。」

▼隠岐不酔氏（姫路同人）は税理士会兵庫県西支部長の改選で五選になり一五選成り不行届きを五度も云い—不酔。

▼川岡霊眼子氏（諫早市同人）は身体の調子、胃、肝臓、血圧、心臓、痔などすべて不調なのでしばらく静かに人間ドック入りをされる由。「神様の病気御試しと云うておき」

▼山田季賛氏（高槻同人）は六月二十二日の休暇に令息同伴、京都近郊の社寺巡りをされた。「天龍寺庭を賞め池を賞め」

▼松下たつみ氏（米子市同人）はコンピューターの勉強に東京へ行き多忙な日を送っておられる。「コンピューター正直すぎて腹が立ち」

▼王紫さん（出雲市）から「過日橘高薫風さんにお目にかかれてたのしうございました。清水白柳先生の時は列車の通過時刻が判らず失礼を致しましたがよろしくお伝え下さい。」

▼志賀木石氏（下関市）は六月二十一日附けの山口新聞夕刊から「東流西流」を連載執筆された。

▼水粉千翁氏（倉敷同人）主宰の川柳道場は六十号に達し、増頁に踏み切られたが、「今回の特選入賞の片山美恵さんは新人で私達俳画グループの方で、水島中央病院婦人科医長のご主人の川柳へのご理解も深く、ぐんぐん伸びる作家と思います。」と新人発掘にも意欲を燃やしておられる。

▼藤村涼子さん（ニューヨーク市）は昨年の帰日の収穫として句集をはじめ百冊以上にのぼる柳書を整理、在米柳人への貸出しを始められた。

▼高鷲亜鈍氏（尾道市）の句集「白黒記」における盲目の詩魂を高揚して作家の内田克巳氏が芸術生活七月号に「無明長夜」と題する一文を掲載された。「句集『白黒記』の特徴は読む者の心に応じてさまざまに分れるであろうが、いずれにしろそこには、常人にとっては空想でしかあり得ない世界の、無数の貴重な断片がとらえられている。それだけでも驚くべき記録である。」と結んでいる。

趣味を超えている

〈生活の中の川柳〉

森下冬青

「川柳塔」の七月号を読んで麻生路郎先生の路郎忌（七月七日）が近づき、奥様（馥乃女史）はじめ諸氏が路郎氏のありし日を書いていられるのに感銘した。それはまた新しい半面を知ったからでもある。

私は、路郎氏の弟子でもないし、先生もまた、金沢の冬青という男を弟子にもった覚えがないと、あの世で仰せになられているだろうし、私の文にニガ笑いもされるだろう。

これから、だんだん自己本位のエゴイストが増大してくる時代性において、麻路路郎先生のような川柳普及に生涯をかけて、己の家庭にマイナスになる運動をする人間がごくすくなくなるに違いない。かつて川柳塔に、路郎氏のお嬢さんが、父、路郎を語るの文中からしても、家庭と川柳普及運動の、経済的、精神的のつながりが、ややともすれば空家になる苦悩があるからでもある。馥乃女史は、〈川柳の理想境いまだ遠しの焦燥と資本の不足との闘いであった〉と仰せになられているも、おそらく奥様は、川柳作家でもあるし、女房として夫の苦しみを経済的、精神的にも共にして、助け合っていられたと信じる。思うに路郎氏は立派な学歴をもち、川柳を職にせず他に職をもてば、楽に妻子と生活をしてゆかれた方であった。なのに職業川柳人として看板をあげ、儲かりもせん川柳大衆普及運動に命をかけて生涯を川柳で一身をかけたその情熱、ファイトは立派なものだ。

ポストまで行くのに丁稚犬を連れ

この句にさし画を入れ、川柳の宣伝チラシを何万も大阪市内をまかれた、チラシを私は見たこともあるから当時にしても大変な道を歩いていられる先生でもある。そのチラシは川柳雑誌の創刊号の頃とも聞いている。で、平坦な道を好まなかったは、実によくわかる。こうした路郎氏の若さの情熱は常に灯を消すこともなく、ゆかれるのに私は、ひかれるし好きでもあった。

その後、誰だったか、忘れたが川柳は文芸として芸術である、その芸術を飯の種にして職業に成り下るとは、いやしい奴だ、と言うのもあった、さて「川柳」は文芸として芸術であるは、ともかく、「川柳」で飯を食べるのは何で悪いのか私は迷った。この世の中に川柳外の文芸も、芸術家と称する人達も、それを職として飯を食べているのが日本中にたくさんいるだろう。その人達もいやしい人間であることになるし、なぜ「川柳」だけが、職業化していけないのか。

巨大都市、大阪市、中小都市にむしろ逆に川柳で飯を食べている人間が増えれば、増える程、川柳人口が多くなることになる、〈川柳が職業になる〉これによって作品も柳論も進歩向上すると私はそう観ている。

（以下次号）

・近　詠・

大阪市　橋本緑雨

民宿のタマゴ産みたてだけのぬくみ
病人に一筆もたす最後の日
永久に住居をさがすとこに立ち

須坂市　高峰柳児

すぐからむ酒癖遠巻きされている
寡婦の若さへ同情のお節介
天災の後手後手続く過疎地帯

柳界短信

森田茗人氏（鳥取県同人）の句碑建立記念川柳大会の作品集が日本海川柳友の会から発行された。五葉のフォトに当日の盛会がしのばれ、大会記を小林由多香氏（鳥取県同人）が書いている。

―**凧のいとのばしてかぜにさからわず**―茗人

故路郎先生をしのぶ

本社句会

—会　場　以和貴荘
—七月七日・午後六時

路郎忌初のナイター句会が好評で、会場のイスが不足し、西尾栞氏のお供養の菓子がたりず、古い言葉だが、うれしい悲鳴とはこのことである。

近畿の方は別として、東京の青竜力氏、岐阜の大八氏、島根の明朗・正朗・清泉氏、鳥取の弘朗氏、尾道の亜鈍氏、竹原の不朽、蘭幸氏、香川の酔夢さんほか遠来の方々や、せんばの宣介氏、番傘の村雲氏、ふ社の言也氏ほか友情のご出席で盛会にしていただいた。

葭乃先生はご命日で万代まで来ておられたが、ご健康上夕刻に生駒へ帰えられた。

生々庵主幹の柳話、青竜刀、大八両氏のお話は、故路郎先生の追憶も新らたに柳塊をかきたてるものがあった。月間賞は奈良子氏。

出席—与呂志・白柳・不朽・蘭幸・双楽・舟遊・柳宏子・河産・八郎・天笑・朝二・大吉・一三夫・千万子・茂美・柳太・文秋・一舟・葛城・摩天郎・滋雀・新之助・多久志・玲人・喜風・奈良子・儀一・与志・痴亭・照一・村雲・竹荘・凡九郎・春巣・青竜刀・大八・天樹・肖二・つき子・いさむ・六竜子・誓二・言也・小松園・好郎・没食子・宏子・慶之助・凡吉・栞・春巳・富久一・頂留子・静馬・花梢・明朗・正朗・清泉・瓢太・弘朗・貞山・維久子・水客・金三・宣介・静歩・柳志・鶴声・恒明・百酒・万的・綾女・季賛・トメ子・功雄・弥生・鬼遊・之保・紫香・野迷路・虎声・庸佑・酔々・素郎・史好・葵水・一二三・酔夢・薫風・形水・亜鈍・〆女・笑痴・智子・君子・以兆・宇宙太・あいき・葉子

席題「金魚」　橋本言也選

スモッグは知らず金魚のエアーポンプ　いさむ
ノイローゼ金魚見ている小半時　静歩
ステレオの上の金魚が落付けず　天笑
父親の声がうるさい金魚とり　紫香
マイカーでマイクで金魚の初夏を売る　滋雀
安もんの金魚ばっかり生き残り　静馬
らんちゆうは図太くめんど臭い顔　生々庵
邸宅の威圧を金魚和ませる　君子
金魚鉢だけの世界で生きている　綾女
一匹の金魚視覚をあやまらせ　天樹
金魚よく動き吉日迎えたり　紫香
縁側の金魚静かな梅雨上り　白柳
デパートの金魚は人の目に飽きる　葛城
孫抱いて金ととと云う年になり　一二三
金魚売りの声冷麦に味をまし　天樹
金魚もう情事を見ないことにする　大八
金魚鉢赤い生命を裏返す　静馬
台風一過小川で迷うている金魚　新之助
選り滓の金魚も越冬するスラム　照一
子に恵まれぬ淋しさに飼う金魚　奈良子
一と夏の生命やっぱり金魚飼う　つき子
失恋をしたと金魚に見すかされ　柳太
長生きをしてねと金魚買いながら　宏子
客席で釣った金魚でわく奇術　誓二
ぶきような金魚すくいを子が笑い　つき子
末っ子が金魚掬いを得意がり　貞山
かき廻す子の手を金魚逆らわず　小松園
金魚掬い子供にコツを教えられ　柳志
赤んべえ金魚ヒラリとアミを逃げ　頂留子
金魚までほめるべんちゃらがいや　恒明
信じ度し信じ度し金魚見つめて　栞
不愛想な大和ことばの金魚売り　一三夫
めずらしいから出目錦黒を着る　舟遊
一匹になった金魚へ話しかけ　宏子
十円の金魚三度めの冬を越し　庸佑
振り袖に似て金魚のUターン　栞
刑事部屋無心に金魚泳いでる　笑痴
愛だけでよう飼いきれず金魚死ぬ　虎声
少年のモラルに和錦生きのびる　舟遊
闘病の長さ金魚の性を知る　花梢
金魚飼うてからカルキが鼻につき　新之助
物思い金魚もじっと動かない　蘭幸
石一つ金魚に夢を入れてやり　慶之助
金魚一匹掬う大人のまじめ　宣介

席題「猛烈」　岡橋宣介選

猛烈なCM三つの子にまでおぼえ　頂留子
猛烈と云う流行語下校道　茂見
猛烈に食べれと胃散のスポンサー　玲人
猛烈なことだんなァとおだてられ　春巣
猛烈さミニスカートもそのひとつ　以兆
猛烈な求婚でしたとのろけられ　一三夫
猛烈を地で行くミニがよく似合い　春巳
猛烈な男交通事故で死に　紫香
猛烈な言葉の端に見る若さ　誓二
猛烈なポーズカメラの手が狂い　つき子
猛烈な恋で添われる日を信じ　摩天郎
砂浜で猛烈な恋水をあび　維久子
猛烈な二人やっぱり灯を避ける　万的

猛烈に叱って母も泣いている　静馬
ゲバ棒の猛烈ぶりを求められ　形水
猛烈な鉾先かわす時かせぐ村雲
猛烈を売りものにしてよく稼ぎ　柳志
猛烈と女あっさり稼いでる　酔々
猛烈に稼いでホステス身を隠し　肖二
猛烈な暑さ金魚になりたい日　智子
猛烈さみじんも見せずナンバーワン　一舟
作意猛烈になり売れない詩　酔夢
猛烈を流行語にしてコマーシャル　あいき
猛烈な恋猛烈な雨の中　摩天郎
猛烈なキッスを見せる予告編　柳太
カタツムリばく進太陽をさけている　天樹
猛烈に好きとチップへ寄って来る　柳太
猛烈な反対もした孫を抱き　朝二
言い募る女に止り木がない　小松園
口角泡を飛ばしたほどでない勝利　宣介

席題「祭り」　**藤井明朗選**

遠ざかる記憶の中の祭の灯　凡九郎
出ぎらいな母を連れ出す水都祭　言也
神主を見捨て花火へ散っていき　素郎
絵馬堂へデートする日の秋祭り　静歩
病める児に祭の太鼓聞かすまい　維久子
船渡御も年々うすれゆく情緒　村雲
お祭り気分でゲバ棒眺めてる　紫香
出稼ぎを待つ子に祭り黄昏れる　功雄
祭りから抜けてふたりは影となる　素郎
祭りから祭りへサクラ急ぐ闇　素郎
生き抜いて今日は祭りの笛を吹き　酔々
七夕祭子の夢をこわす雨　春巣
定年のやっぱりメーデーのぞきに来　春巳
病院を抜けて祭りの波に乗り　水客
背広着て祭気分にとけあわず　恵二朗
お神輿は臨時氏子の肩でゆれ　頂留子

祇園祭り京の命をわきたたせ　宏子
雑草も祭の夜はゆれている　天笑
お祭の夜をはしゃいだ下駄の音　天笑
旅の幸ねぶた祭り逢えた宿　多久志
夏祭り寄付帳やっぱりついて来る　与呂志
半分は酒におわした夏祭り　葛城
ご神燈あかりを入れて渡御を待ち　誓二
祇園祭室町通りは奥も見世　金三
祭りにも帰って来ない子を案じ　柳太
かつぐ人ぶら下る人神輿派手　多久志
役割りにまだもめている前夜祭　好郎
担き手が今年も足らぬ村祭り　滋雀
御所車昔そのままきしむ音　貞山
来合わせて祭りの酒に酔いつぶれ　君子
村祭り故郷捨ててから恋し　つき子
里帰り祭りの顔がなつかしい　つき子
だんじりへ父の血をひく子と見えず　水客
よく稼ぐプランを立てる夏祭り　季賛
郷土色豊かに祭囃子聞く　柳宏子
祭笛父の癖までそのままに　喜酔
信号に神輿はやっと汗を入れ　笑痴
お祭へ他人の晴衣を縫う夜業　富久一
お祭りの世話は年寄にまかしとき　いさむ
雨空に祭りの晴着脱がされる　一三天
宵祭りパパを残してみんなが出　明朗

兼題「寝転ぶ」　**若本多久志選**

寝ころんで見る月淋し独身寮　章雅
寝転んでみたし畳の肌ざわり　いわを
寝転びなはれと師弟のなごやかさ　阿茶
寝転んだ牛の鼻先き蝶が舞い　鶴声
寝転べば孫が枕を抱いてくる　旅風
寝転んだことを電話に叱られる　虎城
寝転べと土手のみどりに囁かれ　恵二朗
寝転んで今日悔いることない広さ　千翁

里帰りから寝転がる癖がつき　虎城
寝転べば孤児の涙を誘う空　止水
寝ころべば船室の窓に瀬戸の月　章雅
寝転んでボソボソ話す里帰り　一栄
寝転んで思案しなおす目をつむり　千梢
寝転んで妻の小言を背なに聞く　雅佐女
寝転んで歌う青空恋があり　芳子
草に寝て空の青さへ未来かく　舟遊
寝転べば結婚しようかなと思い　不朽
寝転んだまま集金をことわられ　朝二
寝転べば待ってたように蚊がたかり　季賛
呼びリンは寝転んでいると知れ押し　春巣
帰朝して先ず寝転んだ青畳　肖二
寝転べば天井のシミに在る思想　宣介
猫のほか寝転ぶひまのない暮し　一舟
ねころんでいてもやりくり走馬燈　千万子
寝転んだ夫へ毛布そっとかけ　双楽
寝転んだ視角に不抜と額の文字　滋雀
寝転んですねて見たけど腹がへり　葛城
辞書を枕に自分に逆うてみる　水客
寝転んでローカル線の終電車　智子
傷心が転ころぶ砂をにぎりしめ　天樹
寝転んで働く蟻の幸を見る　富久一
寝転んだ女の視野に雨がふる　舟遊
ねころんでわがなす術を月に問う　天樹
逆転へ寝転んだテレビ起き上り　生々庵
寝ころんで釈迦は涅槃に入り給い　痴亭
ねころんだ親爺の疲れた細い足　一二三
釣りあきた舟でねころぶ空の青　紫香
寝転べば友の話しがまだ続く　鬼遊
寝転べば悩みのピントずれ始め　天笑
寝転べば愚かな智恵をかみしめる　柳志
寝ころべばいよいよせまし二DK　瓢太
登りつめ寝転べばなお雲の峰　百酒
寝転んでばかりすべきなき避暑の宿　酔々

寝転んだまま新聞を足で取り　形水
寝転べば女は帰りますと立つ　素郎
寝転べば天井のしみ地図に見え　与呂志
寝ころんで見る月淋し独身寮　章雅
寝転んだ草の香りは故郷です　酔々
寝転んで生きる虚しさ耐えている　酔夢
ねころんで意地張りすぎたと思うこと　栞
寝転んだかたちに草が押し倒れ　小松園
寝転べば母もったいなくもやせ給い　一三夫
寝ころべばみんなまたいでいくひと間　花梢
寝転んだ飯場に故郷と同じ月　一二三
寝転んであぁ凡人は素晴しい　照一
やりくりのつかぬごろ寝と妻知らず　好郎
寝転べば蹴られるおそれも二DK　つき子
船底に失意の旅を寝ころんで　奈良子
寝転んでパパは勉強しろといい　酔々
よく見れば寝釈迦は昼寝の姿なり　一三夫
寝ころんだままで居留守の手を覚え　野迷路
寝転ぶにしてもドタッと金がなし　素郎
寝転んだ場所も知ってて酔い上手　虎声
共稼ぎ寝転ぶ妻を叱りかね　金三
寝転んでする心配はたかが知れ　笑痴
警官も寝転ぶ二人へそっと過ぎ　大吉
寝ころんで明日の希望を簡易やど　六竜子
思策つきて寝転べば雲おもしろし　不朽
脱ぎ捨てて寝転ぶ幸も里帰り　どんたく
寝転んであとは野となれ飯場雨　酔夢
寝転んだところで寝てる父の酒　蘭幸
寝転ぶ娘に女を感じ息を呑む　君子
寝転んだままで靴下ぬがす酒　柳太
寝転んで女女の身だしなみ　花梢
寝転んで話のできる母があり　清泉
寝転んでこの宿命を噛みしめる　多久志

兼題「雀」　　川村好郎選

栖鳳の雀が遊ぶ雨の庭　どんたく
深呼吸大きく雀の声も吸い　恒明
鳩の餌を拾う小雀朝へ来る　六龍子
過密都市やなあと雀は語り合い　摩天郎
雑草に似たり雀の素朴さよ　一三夫
雀にも案山子の顔に好ききらい　多久志
われと来て遊ぶも雀街に居ず　瓢太
雀鮨道頓堀に余命あり　青竜刀
電線に雀が見てるデモ騒ぎ　言也
堂島の雀も消えて排気ガス　照一
宵寝して旅の雀に起こされる　水客
斗病の長さ雀の目と出合い　柳志
焼き鳥になるまで雀鳴きつづけ　小松園
雀もう珍客というちの庭　天笑
栖鳳に描かれた運のよい雀　静馬
恋人か親子か雀よくしゃべり　春巳
新婚の夢を雀がかきたてる　清泉
やかましい教育ママと群れ雀　八郎
かくれんぼする戸樋もなし雀の子　阿茶
拾い食いしても雀に空がある　舟遊
燕雀というその中に僕もおり　百酒
雀へも惜んで穫って余剰米　百酒
大阪の雀と見えてすすけて居　柳志
宅地ブーム雀も宿を追い出され　つき子
雀の涙程とは貰う方　栞
大阪の雀車位に驚かず　柳宏子
脱稿の空しらじらと雀鳴く　奈良子

兼題「浄土」　　西尾栞選

浄土まだ行く気になれず貧に耐え　芳子
子沢山浄土を思う暇もなし　正朗
あのへんが浄土やろうか雲の峰　恵二朗
赤信女浄土へ予約している気　菱水
今日終えし我が家の床を浄土とす　どんたく
流れついて郷子の実一つ浄土なる　梅志
観光のマイクが説いている浄土　旅風

雅号ぶっちやけばなし　(73)

まんてき

あまん

・的万　万阿・

〝万的〟この号の付いた頃はそう確実なものはない。ただ若い頃、詩や和歌の同人誌に首をつっこみ、写真も街のクラブを覗いていたので誰云うとなくこんな愛称がついてしまった。

川柳を始めたのは昭和八年相変らずの星霜が三十何年かつづいている

〝阿万万的〟これを見て紋太先生がマンテキと読むのですか、私はまた、アマンマンデーと呼ぶのかと思っていたとの笑い話、元々私の本名阿万修もそう云えばアマンシュウの音読み出来るし、阿万なる姓は淡路島の南端にある街の名前、ここは瀬戸内を荒らす海賊の棲家だったとこだとか……こう云えばがめつい男に見えそうだが万的自身至極お人好しでいつも損をしている方である。

国鉄職員（五十一歳）

浄土とは 初日に染まる こころかも　章雅
俺に似よ俺に似るなと 浄土から　朝二
昭和元録 浄土はここにあるものを　いわを
わしは今 極楽浄土と酔うている　柳宏子
雑音の ない浄土に 心 おちつけ　水客
恐山浄土の 声を聞いている　静歩
ロケットが飛んで浄土も落ちつけず　いさむ
浄土とは無欲の中とわかりかけ　好郎
砂風呂は現世の浄土 足伸ばす　奈良子
お浄土はコテイ思わず風が吹き　春巣
お浄土に雑草として生まれたし　生々庵
はったりもなくてスリルのない浄土　柳志
浄土への順 敬老会座わらされ　春巳
お浄土もよいがやわらかい 女の手　多久志
お浄土へ来ても鼾を邪魔がられ　春巣
浄土でも人間不信になる不安　河産
浄土 過疎 地獄 過密と閻魔庁　野迷路
きてみれば浄土はどこか 退屈な　大八
鈴ふれば浄土につづく 土のいろ　与呂志
そうがいな浄土も女上位とか　舟遊
五十路から浄土へ進路 変えた人　笑痴
政治家の 所詮 浄土へ行けぬ顔　紫香
おお来たか 相にく浄土 酒がない　千万子
君は天国 僕は浄土 いざさらば　双楽
金ですむ 母は浄土へゆかせたし　舟遊
梅雨晴れの富士に浄土を見るおもい　奈良子
浄土へつづく寺にも 主流 反主流　万的
二人で いります 浄土と思もてます　凡九郎
三界火宅女房の 留守は 浄土なり　百水
浄土に迷い込んだ一匹の鬼の 憂鬱　薫風
六帖の 浄土となって眠りこけ　薫風

兼題「一と握り」　北川春巣選

握手して欲しいファンのある 強味　茂見
一握りの砂に植物検疫所　玲人
一と握りの 真心がほしい 昨日今日　〆女
一と握り年季の鮨はかるう 置き　宏子
一と握り 群衆心理期待する　凡九郎
一と握り 塩を求めた祖母の味　玲人
一と握り 丁度の手首で達者なり　肖二
一と握り 職人の勘おそろしき　白柳
一と握り足すサービスでようはやり　好郎
一握り 宛の奉捨で堂が建ち　葛城
一と握りでも あの時の米の味　野迷路
一握り一握り焚出しの山　いわを
ワンマンの座に 実権を一と握り　言也
一と握りの善意が実り杵の音　笑痴
一と握り 土万円の上に住み　百水
一と握りの又もざらざらした 政治　不朽
一と握りの 土も持てんが国案じ　一舟
一と握り笑くぼを添えてまけてくれ　恵二朗
一と握り 塩借りた過去 忘られず　礎山
一と握りでよし 浮世にしがみつき　いさむ
一と握りの学生国中もてあまし　河産
一と握りの土へ団地の花が咲く　春巳
一億を ハラハラさせる一と握り　頂留子
一と握りの餌へ肩まで鳩が来る　文秋
一と握り 善意の山の重いこと　柳宏子
一と握り良心の重さに耐えて生き　生々庵
一と握りにされそうな家業継ぐと云う　恒明
腕づくで取った遺産が一と握り　千万子
主義主張ない無所属の一とにぎり　一二三
一と握りの土と話せば長くなり　天笑
一と握りの土地ふるさとが捨てきず　水客
一と握りのレンゲで土の子に帰り　万的
一と握りの裸銭あり生ビール　栞
一と握り足して陶土火を見詰め　小松園
人生観ころり変った一と握り　千万子
一と握りされそうにいる母囲む　蘭幸
一と握りほどの独立国が吠え　素郎
一と握り あぐらかかせて国貧し　逸名

★**川柳並木会**で、第三回笠岡港まつり協賛川柳大会を開催。
―時　八月十日（日）十一時から
―所　笠岡市労働福祉会館（吸江荘）
―題　伸びる・信号・夜市・蟹・ヘルメット
投句先は、笠岡市山口木山遠二宛。（各題三句以内）
―会費は三百円（投句者は百円、誌代の郵送料）昼食呈。賞品は市長賞ほか

京風天婦羅
木戸
伊藤入仙
京・祇園縄手新橋上ル東側
電話 (561) 3494番

▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

南大阪川柳会　金井文秋報

父ゆずりの気骨娘の方が持ち　あいき
握手する勝利へ皆んなの手がぬくい　雀踊子
気骨ある故の左遷を惜しまれる　滋雀
ご利やくさえあれば神よし仏よし　文秋
裁判に勝って友情ひびが入り　柳志
ふけば飛ぶような躰でもっている気骨　凡九郎
光陰の矢は極楽を近うする　吸江
ファンだけが逆転勝をまだ信じ　好郎
戦勝の陰に万卒骨埋ずめ　誓二
人間ほど勝馬興奮しておらず　静馬
矢印へ喪服で曲る不幸な日　金三
鏡台へ女勝利を意識する　小松園
孫の競技何ちらも勝った事にする　八郎
神仏に頼れる妻はようねむり　一舟
一勝を敵に与えて置く余裕　形水
不戦勝危い星を持ちこたえ　大吉
子よゆる せ土になるまで抱く気骨　冨久一
勝利感こうも私を喋らせる　智子
八幡へ詣でたしるし矢を捧げ　綾女
神仏もブームに乗ってよく稼ぎ　貞山
気骨ある園児積木の出来るまで　儀一
鼻の穴ひろげて勝ったこと話す　白柳
矢の続く方へホステスくらがえし　千梢
民主主義明治の気骨邪魔にされ　肖二
経塔に律寺の雀袈裟のいろ　薫風
酔いしれて矢も鉄砲も恐がらず　鬼遊
骨のある一人を組合もて余し　柳宏子
女房は手術の間手を合せ　句楽坊
神仏の加護を信じて今日も無事　双楽
気骨ある奴やっぱり社長になってた　凡子
鎌倉の名残りしみじみ律寺の香　君子
矢襖で鎧を囲む孫が出来　一栄
すねているようにも見えている気骨　葵水
木刀へ一ト汗気骨まだ確か　章雅
勝つ事に夢中勝利に遠ざかり　千代
ノンセクトなりの気骨で武装せず　虎城

玉造川柳会　西出一栄報

急病の子供へ医者の遠い事　双楽
約束のデートへバスがまだ来ない　肖二
発車ベル会計幹事まだ見えず　柳志
遅刻寸前遮断機仲々上らない　柳宏子
くじ運の悪い息子が引きにたち　一舟
巻添えになるまい心おさえこみ　凡九郎
足並みの揃わぬ内に斬り込まれ　誓二
ちぐはぐな足並み旗をたててくる　金三
年寄りが居るのでみそ汁が熱いよ　白柳
みそ汁の追憶ドラマ展開す　天樹
捻座の子大きな顔で甘えてき　智子
一石二鳥ねらうどん欲あからさま　綾女
ねらわれているとは知らずバーの客　鬼遊
童謡の月は科学に狙われる　弓彦
さりげなく全神経でねらってる　君子
人生の狙い外れたままで老い　六龍子
狙われているかも知れぬ灯を歩き　竹青
孤独感遠音の三味の淋しすぎ　葵水
何云うて行ったかマイク遠くなり　あいき
左遷され鴛の遠音聞くゆとり　あいき
石焼きの遠音を子供待ちきれず　静馬
消防車遠音になって水を飲み　一栄
おみこしのざわめく音が近くなり　文秋
都会のどこかが起きている遠い音　雀踊子

南海電鉄川柳会　（大阪市）辻圭水報

クラクション頻りにならし降りて来ず　八郎
満員車降りそうな人の前に立ち　春子
ふった人下車したとこで顔が合い　清涼
気がつけば終点下車はしたけれど　貴山
途中下車して駅前のパチンコ屋　圭水
ふところの財布で飲める駅で降り　一二三
下車駅がそろそろ近いコンパクト　笑痴
土地カンが秘かに降りた羽島駅　金三

和気川柳会（岡山県）　藤原秋月報

手土産を見向きもせずに断られ　貞子
年頃が母に靴まで磨かせる　胡風
初孫を土産のように抱いて来る　秋月
おかっぱも個室をせがむ年になり　一風楼
下宿にも手土産提げる里の母　伊久野
年頃を喜ぶひまもなく急かれ　みな子
発車ベル土産と共に押し込まれ　繁子
年頃が襖の陰で立ち聞きし　渓泉
手土産を提げて陳情村を出る　芳明
年頃の視線瞬時の波を打ち　艸平
湯の宿の浴衣で旅の土産買う　恭子
選り好みして年頃の春は過ぎ　康明
悪友の土産話に唾を飲み　知水
年頃のミニはきれいに脚を組み　梅泉
楽しみは孫の笑顔を見る土産　老梅
早産を土産でないかと疑われ　渓水

川柳たましま　水粉千翁報

対決へ押しの一手の鍵を持ち　里風
考えて葱を一本買い添える　三辛堂

嘘一つ壁に埋めて飯を食う　林鶴
奥さんのムードで酔っている平和　扇水
間隔が二、三歩あって怪しまれ　千翁
百姓で果てよう自然を友として　筒子
一本の白髪へ父と娘の平和　秀子
何時にない笑みだチェックをしてごらう　柳子
口惜しがるように一本ずつ入歯　俊子
もう一と押しが父さんの勘にふれ　皷草
自然からはみ出たように祖母達者　慶子
一本の糸へ記憶がよみがえり　澄子
満員車別な私の貌で押し　三林坊

和歌山短詩型文学クラブ　垂井葵水報

男の愁い紫煙となり胸を這う　智恵女
豆一つころげしらけた座を救い　淳子
ベルを押す月当番の札白し　みさを
当番へ化粧せぬ顔走り込み　五月
掃除当番雑巾の色赤くなり　泰子
留守の家当番の札ぶら下り　佐知子
豆こげる臭いミシンの音とまる　富子
指の豆自慢に語るパチンコ狂　昭伸
応答に困り煙草に火をつける　二郎
妥協点出ない煙草の煙満ち　太茂津
スモッグが多いと地代据置かれ　三幸
豆買えば鳩には善男善女なり　政夫
敷居高しおたふく豆に似たる妻　盛太郎
宿直をおがみ倒され金借られ　公作
サンダルで出る当番の軽い腰　不二也
ステテコのままで当直電話きく　智水庵
小一の当番誇らしく働き　次章
宿直へ何度掛けても出ぬ電話　城石
パパ当番おかずは子らにみすかされ　泰彦
風船一つ当番室も風がある　雄久
当番がまたかまたかと救急車　光治
あのくらい喋べってもう豆がない　葵水

どんぐり川柳会（大阪市）　川村好郎報

冗談を飛ばしてる間に注射すみ　吸江
たかがゴキブリ女の悲鳴窓へ飛び　痴亭
飛び込んだ海女の素足が目に残り　酔々
飛び起きてもういちど寝る日曜日　天笑
飛んだり跳ねたり貯金もちやんとしています　史好
駅弁の一箸ごとに旅すすむ　鬼遊
貫録へ飛び切り上等買わされる　幸子
高飛びへテレビニュースが先まわり　双楽
兄ちやんの飛ぶ石段は一つ上　孝子
科学とは月に飛び込む日を競い　喜風
郷愁は空行く鳥がうらやまし　功雄
小川飛ぶしぐさにも出る適齢期　虎声
飛ぶ時間より空港までに要る時間　比呂路
光るから飛んだ蛍が捕えられ　大吉
飛び込んでみたら食堂準備中　真砂
水溜り飛ぶにも男の手にあまえ　生長
下駄履きに弁当早出の職に生き　弥生
駅弁に早や新郎の言い付かり　儀一
飛びながら雁は親子をたしかめる　小松園
会費滞納除名すれすれで払い　白柳
何号が飛ぼうが星座乱れない　好郎

どんぐり川柳会（羽曳野市）　川村好郎報

花いけるより人の美しさ　石倉
花束が再起の歌手を元気づけ　青木
借金を花輪にくるんで店開く　豆行
細くともおらが田圃へ通う道　笑女
人道を唱え核兵器を競い　桂馬
ハイウエー出てから時間かかり過ぎ　賀津也
停年へこれから花を咲かせる気　吐来
花言葉虚栄のなかに住む女　一治
高嶺の花めとり一生尻敷かれ　たつや
高嶺の花見ているうちに友が折り　酔々
わが恋は岩壁に咲く花のごと　九鬼
事故現場道端の花生きており　敏愁
片道は親にまかせて里帰り　輝楽
月給日道草させて罪を分け　善太郎
浪人はほんの道草と周囲の眼　鈴木
人生の道草女のことにふれ　いわを
誠実が近道だったと悟る老　好郎

まるべに川柳会（大阪市）　川村好郎報

新婚は居眠ることも許されて　寿子
信じてはいるが気になる午前様　一世
居眠りも堂々として部長立つ　児
末席はあきらめ顔の手酌なり　瓢太
新緑へ縁なく刑務所厚い壁　泉睦
うたがいはあるが信じていたい彼　幸子
もの云えぬ野良猫いつも疑われ　節子
新緑を縫うアッベクも景の内　好郎

あすなろ川柳会（大阪市）　川村好郎報

出稼ぎの留守郵便の声を待ち　双楽
母の息足して風船ふくれだし　慶之助
どん底に落ちて足並み揃い出し　弓彦
理解とは別ぐちも出るストの朝　青香
朝入れるつもりの手紙持ち帰り　瓢太
重役といわれチップを惜しまれず　ゆきを
やせ我慢知って内助が手綱とり　百酒

こと金にかけては渋い青二才　素郎
電話ではにごし郵便で断られ好郎

こまつ柳壇（小松市）　山上千太郎報

窓を打つ雨に静かな夜を感じ松水
案の定始球式から降り始め弘子
連日の田植えの疲れ雨をほめ魚山
耳たぼにふれればひとりぼちの俺たつ路
業界へ寝耳に水のトップ記事城南
イヤリング替えてデイトの耳化粧柳
遠い耳仏の顔も日に三度末吉
慈雨ながら二日つづけば疎まれる耳打が気になる心のかげりもち弘美
擬宝珠の橋目に浮ぶ京の雨　千太郎

川柳塔松江支部　祥月報

ネオンの灯若い季節のシルエット　ゆきえ
七転び八起するたび土根性唖蟬
窓の灯へ誤解されそうなシルエット花子
根性の自負へそっぽを向いた運千代子
三日月へあれは地球のシルエット瑞枝
なまめかテレビの場面のシルエット泉甫
ゲバ棒のうなり総理のシルエット美城
解散の街の声聞くインタビュー雪美
老松の根性小山をにぎりしめ白汀
善悪の岐路に佇む影法師軒太楼
立ち話結局潜る縄のれん遥児
名目は解散している暴力団鶴丸
いま恋の崩れるところシルエット孤呂二
かの君か窓に動いたシルエット晃男
待ちぼうけしょぼしょぼ雨が降ってる祥月

駒つなぎ　岸南柳報

蝶追うて野井戸あぶなし声かける規一郎
ブロックの塀の向うへ逃げた蝶育園
嫣然と毛虫の過去を捨てた蝶みよ
せがまれる孫に蝶々が見つからず小路
蝶々のタイミングよし嫌な奴柳信
蝶を追うお手に血が出るバラ牡丹　南柳
捕虫網牛若丸のような蝶恭太
アベックについて離れぬ蝶一つ眉水
黒胡蝶飛べば忍者という姿小松園
色彩のはげしき蝶に似たる人白柳

ウイロー社句会（ハワイ）　快夢起報

世渡りは結局欲と二人づれ泉水
特売へ買いもせぬのに抱えこみ万里歩
無であった欲の権化はそれっきり暁舟
淡々と生きて欲とは遠くいる カロ女
三日でも欲を捨てたいこの世から紅茶
ラスベガス欲張りどもの娯楽場逸名
知識欲盛んな幼児に母あわせエス子
あの欲も消えたと隠居淋しそう蒼蛇楼
欲と欲虎視耽々というかまえカロ女
月旅行欲は太いが身がもてず紅溪
欲すてしまえば生きがいない体泉水
欲深く貯めてごっそり置いて逝き魔花麗
老いても儲け話に耳をかし万里歩
老いてなお斗志満々事業欲快夢起
三日でも欲を捨てたい年となり紅茶
蝿の欲俺の膝まで飛んで来る暁舟
物欲もあきらめつけてたそがれるエス子
内臓を入れかえてまで生きる欲拝山
意欲旺盛なれど足腰伴わず峯田

城北明朗句会　川口弘生報

ひとり者泊っていかせる雨が降り弘生
給料と物価ともなわずまだひとり多幸
ひとり者彼女来る日は掃除する隼人
ひとり者飲んで帰れば釜で食い進
ひとり者さびしさ歌でまぎらわせ久子
ひとり者と聞いて世話好きほっとけず雅万
はた目には何の苦もなきひとり者繁子
貯えがなかなか出来ぬひとり者加太
火気厳禁馴れりや平気でタバコ吸い茶々坊
捨てられたのに野良犬に子が生れ富士
うらまれつにくまれつつも野犬狩り一休
円満は嘘を上手に使い分けハヤ
嘘まことカクテルにして世を渡り一登

▼またすこしこの欄に借りができてしまったことをおわび申しあげます。

（編集部）

玉造川柳会（大阪市）

時　八月十一（月）午後六時
題　情緒、気まぐれ
　　特別出題「月旅行」
所　玉造交差点南一〇〇米
　　大阪信用金庫

南大阪川柳会

時　八月二十日（水）午後六時
題　軌道、迷信、汗、ゆっくり
所　松崎町二丁目　以和貴荘

堺・若芽川柳会

時　八月十三日　午後六時半
題　横丁・予約・涙
所　堺市九間町山ノ口筋
　　八木　摩夫郎　方

南海川柳会

時　八月二十一日
題　過労・蒸発・けじめ
所　ナンバ高架下　親和クラブ

川柳塔社八月句会

日時　8月7日（木）午後六時

会場　以和貴荘
阿倍野区松崎町二丁目
電話622・1275番

兼題　柳話　川村好郎
「他人」　金井文秋選
「カーテン」　山川阿茶選
「出世」　菊田いさむ選
「伝説」　菊沢小松園選

席題　三題　当日発表

会費　二百円

★★投句だけの方は切手五十円封入
電話での投句はご遠慮ください

各題三句

大阪市南区鰻谷仲之町20
川柳塔社
電話大阪(271)3985番

9月の兼題　「ルール」「指圧」「前借り」「駅弁」

十月号発表（8月15日締切）

川柳塔（10句）　中島生々庵　選
近作柳樽（10句）　菊沢小松園　選

課題吟（各題5句以内）
「チャンス」　木山遠二　選
「本宅」　西辻竹青　選
「歌手」　山内静水　選

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

十一月号発表（9月15日締切）

川柳塔（10句）　中島生々庵　選
近作柳樽（10句）　菊沢小松園　選

課題吟（各題5句以内）
「ダンス」　石居高志　選
「養子」　磯野与志　選
「夕刊」　早川清生　選

★川柳塔の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

定価　百四十円（送料六円）
半年分　八百七十円（送料共）
一年分　千六百八十円（送料負担）
昭和四十四年七月二十五日印刷
昭和四十四年八月一日発行

大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地
編集兼発行人　中島蓬太郎
印刷所　大陽印刷株式会社
郵便番号　五四二
大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地
発行所　川柳塔社
電話大阪・二七一―三九八五番
振替口座　大阪・三三三六八番

純良医薬 ⓓ 第一製薬

●140mm×100mm＝3枚入

うちみ・肩こりに
ペタンと貼るだけ！
〈新型パップ剤〉
パテックス

・ペンペン草・

★路郎忌は盛会だった。遠来の方々には、ほんとうにありがとうございました。

★石原青竜刀・東野大八両先生にもお目にかかれた。青竜刀先生が席題の「猛烈」は「モーレツ」にしないと流行語の意味をなさないではないかと云われた。ボクもはじめは「モーレツ」とカナにしようと思ったが、小川ローザの白いパンティーから「オー、モーレツ」というCMの流行語が、どこまで浸透しているか―。平均年令五十歳という句会出席者をおもえば「猛烈」のほうが無難だと考えた。

★青竜刀先生からご帰京後たよりをいただいた。―酒をのまぬゴーケツの風貌は特に印象づけられた―と。

★大八先生からは一相変らずの奇人ぶりに腹をかかえて愉快だった―と。

★どうやらボクはマトモな人種ではないらしい。

★青竜刀先生から「インクと紙の浪費」だとお叱りを受けるような本号になった。もう8ページ使えば、なんとか格好がついたのだが、ゼニを大切にしたため、せっかくの原稿も次号回わりとなり、ご執筆たまわった方々には申しわけなく思っている。

★スポーツの世界に〝特訓〟というのがある。いつかもここで書いたように、路郎先生は、ボクにご秘蔵のもろもろの柳書を全部読ませようとされたが、ついにボクは一書も手にせず、ご期待を裏切ってしまった。

★路郎先生は薫風さんほか有望作家の特訓を計画されたことがあった。薫風さんはりっぱに生長した。

★漫才の秋田先生は、毎月百冊近い書籍を、ボクにくださる。パンフレットのようなものまでまじっているのだが、これもある意味の〝特訓〟だと受けとって、目下二、三行ずつ読む練習をしているのだが……。

★ラジオのほかに新聞にも書くようにしてくださったが、編集の手を抜いてもいいから台本を怠けてはいけないという厳命だ。特訓される光栄に感謝している。

★炎熱の夏も健康への特訓であろうか。だが、汗っかきだから、編集室へはいるがイナやハダカになる。葉子さんにはすまないが、ズブぬれのシャツが乾くまではエチケット不在というところだ。

★シャツが乾くと「ハイ、さいなら」こんなボクだから、なかなか電話でつかまえることができないようだ。ヒルまで寝ているし、編集部にはシャツが乾くまでよりいないのでご迷惑のかけっぱなしである。

★故路郎先生がよく云われた―急ぐ時は電話より手紙のほうが早い―と。これは事実で、なるべくならハガキのほうがありがたい。

★アポロはギリシアの神のなかでもピカ一だが、11号は月面着陸で世紀のピカ一となった。おめでとう。

★暑中広告深謝と豪雨禍各地へお見舞い申しあげます

（不二田一三夫）

できたての生ビール 新発売
アサヒビール 本生
レーベルの日付けは新鮮なうまさのしるしです

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
昭和四十四年七月二十五日　印刷
昭和四十四年八月一日発行　（毎月一日発行）

川柳塔　八月号

定価　百四十円　（送料　六円）

おはよう
カドニカ！

どんなヒゲも
キューンと一発！
さわやかなキレ味

くり返し
くり返し使える——充電式
サンヨー
カドニカカミソリ
エック

電気カミソリの
ベストセラー
SV-1000
¥2,980

SANYO　三洋電機株式会社

国立公園　奥新和歌浦
・雑賀崎

国際観光旅館
うおまたろ
魚又楼

風光明媚な
海岸美を
誇る

TEL 和歌山（44）0431・1186(代)
大阪案内所　（641）3564